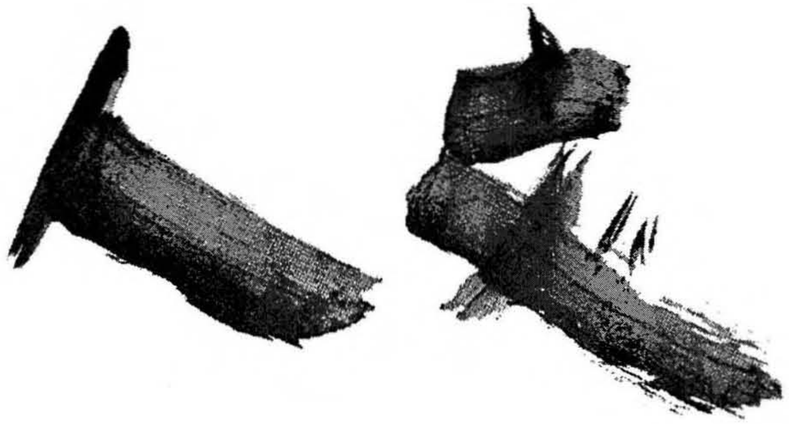


第五六号

2009

京都大学人文科学研究所

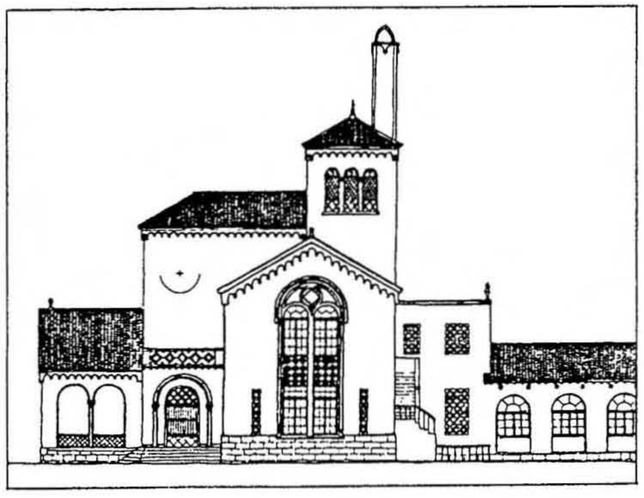
ISSN 0389－147X

人文　第五六号　二〇〇九年六月三十日
京都大学人文科学研究所発行
共同印刷工業
非売品

人　文　第五六号

2008年 4 月—2009年 3 月

も　く　じ



随想

北白川の建物雑感 …… 曽布川　寛 …… 1

おしゃべり …… ミカイル・クシファラス …… 9

講演 …… 9

夏期公開講座 …… 9

悪名高き正史——沈約『宋書』と魏収『魏書』——（藤井律之）／カフカスのとりこ——トルストイ以後のカフカス山岳民の表象——（伊藤順二）／読まれなかった古典——大唐西域記——（高田時雄）

開所記念講演会 …… 13

病原菌と千里眼——微生物学史のひとこまから（田中祐理子）／韓国の世界遺産・宗廟の歴史（矢木　毅）

人文科学研究協会賞受賞記念講演 …… 16

中国抗戦時期木刻運動の一側面——日本占領下の木刻運動（三山　陵）

彙報 …… 20

共同研究の話題 …… 32

「中国社会主義文化」としての孫文崇拝 …… 小野寺史郎

共同と共有 …… 藤井　正人

『元典章』と案牘 …… 岩井　茂樹

比叡山で遭難しかけた話 …… 水野　直樹

所のうち・そと …… 38

国際シンポジウム　変化する人種イメージ … 竹沢　泰子

ヴァイシャーリーにて …… 向井　祐介

分かつことのできない友人

——「テロ攻撃」にたいするオリシャのことば——

…… 小池　郁子

リロコボイ …… 浅原　達郎

書いたもの一覧 …… 44

北白川の建物雑感

曽布川　寛

北白川の洋風の建物ができたのは、一九三〇年のことである。当時は東方文化学院・京都研究所と称し、外務省の所管であった。以来、東方文化研究所への改組、戦後の文部省（京都大学）への移管、人文科学研究所・西洋文化研究所と統合しての人文科学研究所の成立、東一条の本館建設など、幾多の紆余曲折を経てきたが、この建物は一貫して中国を中心とする東方学研究の拠点であった。それが、一昨年の移転事業により、人文学研究部と一緒に東方学研究部のスタッフも本部構内の改修所屋に移ることになり、いまは東洋学文献センターの後身である漢字情報研究センターの住人のみとなってしまった。しかし、一年後輩の田中淡氏と私のみは、定年を控えるが故に引っ越しを免除されてそのまま居着き、遂にこの建物の住人で終わる羽目になった。一九七三年の入所以来、因縁浅からぬ北白川の建物について述べてみたい。

そもそもこの北白川東小倉町の地はもともと何も無かった場所である。村上華岳が京都絵専の卒業制作で画いた「二月の

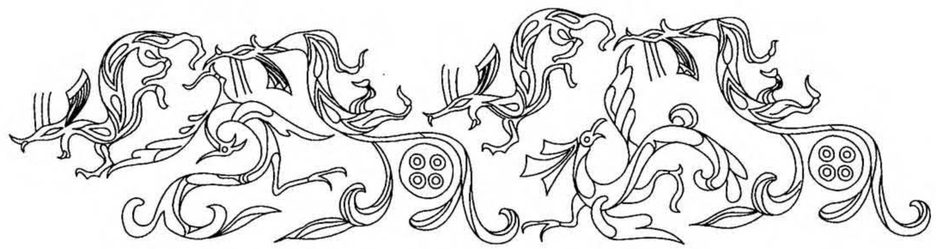
頃」（一九一一年）を見ると、吉田山の北端から見下ろした景観は、東山の麓に銀閣寺と白沙山荘、そして松ヶ崎へと伸びる疏水の水路がみえるだけで、あとは田畑が茫々と広がるばかりである。よくぞこの地を選んだものと感心する。東北に比叡山、東南に大文字山を望み、北山、東山、吉田山に三方を囲まれたこの場所は山に恵まれるだけでなく、西に鴨川へと緩やかに傾斜するこの地は、東側を流れる白川と曲がりくねる疏水に三方を囲まれ、水にも恵まれている。折から桜の季節であり、疏水沿いの満開に咲いた桜は枝を伸ばしてみずもに映えている。山といい水といい、散策、思索にはなくてはならぬものである。

その山と川の真ん中に塔を備えた洋風建築である。人呼んでスパネッシュロマネスク風といい、何でも中米に行くとこうした建築がたくさんあるそうである。しかし実によく考え抜かれた建物である。建築家東畑謙三の京大大学院時代の作だということはよく知られた事実であるが、無論全てが彼一人の設計というわけではなく、創立に関わった老先生たちと相談を重ねての作であった。有名な「橋と塔」という構想も濱田耕作の発想であったと聞く。中国のことを研究する研究所だからといって中国風でなくてはならぬ理由はない、というのも実に明快である。要するに、外観はさておき、内部は所員が実際に研究するのに利用しやすいように設計されたのである。その一例が個人研究室とは別個に共同研究室を設置したことである。特にモノを扱う研究者にとっては広い部屋は必須であり、この共同研究室は実に便利である。その共同研究室の機能を十二分に活用したのが、水野清一、長廣敏雄を中心とする雲岡石窟研究のプロジェクトである。作図、写真なども含めた大所帯が考古研究室に同居し、あの『雲岡石窟』の大著を完成させたのである。

とはいえ、何よりも北白川の建物の魅力はその贅沢な作りである。潤沢な資金があり、それを最大限有効に利用して、建築家と研究者が思う存分に建てたというのが印象である。今は事務室に変わってしまったが、一階正面西側のベランダ付きの大部屋は当初は食堂であったというから驚く。地下に中国人コックの詰める厨房があり、今は図書の上げ下ろしに使っているダムウェーターで料理を上げたのである。その他、一階ホールの大理石の柱といい、二階閲覧室（講堂）の天井に張ったコルクといい、全て外国に特別発注したものであった。一九九六年に行った建物の大改修の目的の一つは、老朽化に伴う耐震補強であったが、その前年の阪神・淡路大地震では塔の煙突にひびが入った程度で殆ど被害はなく、地下室の壁に至っては三十センチもの厚みがあることがわかり、改めて盤石との太鼓判を押されたほどである。またこの建物の快適な要因として誰しもが高い天井をあげるけれども、今となっては容易には得られぬ贅沢の極みといってよかろう。修道院風の部屋と廊下に囲まれた中庭の池も一服の清涼剤である。これらはどれもこれも、この建物が当初、文部省ではなく外務省の所管であったことに起因する。単に教育・研究が目的の文部省の建物であったならば、と

てもこれだけの「無駄」は許されなかったであろう。

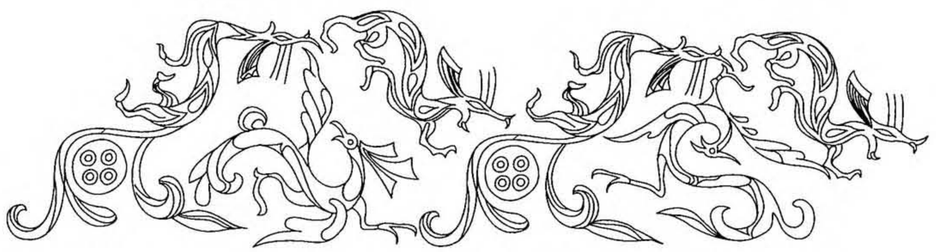
重要なのは今後この建物をいかに有効に活かしていくかである。今年は開所八十周年に当たるが、八十年はこの建物の耐用年限だったのか。確かに歳を重ねた建物は現在急速に進む情報化に対応するには不向きである。しかし建物は人が住まなければ老朽化する一方である。かってこの建物は東洋学の情報発信基地であった。深夜、暗い灯りに照らされた廊下を歩くと、床といい壁といい先学たちの汗がじっとり染み込んでいるのに気付き、重苦しくなる。壁を塗り直してもそれは消えないものである。おそらくそれが伝統というものであろう。理科系はいざ知らず、文化系の学問は伝統と、贅沢と「無駄」の中でしか、情報発信に値するようなものは何も生まれないと考えるが、いかかであろうか。



おしゃべり

ミカイル・クシファラス

先月のこと、私の友人であり、本誌の編集を担当している立木康介が、客員教授（の務めを終えた者）は本誌巻頭の随想欄を担当することになっているという慣例を引き合いに出して、なにかそういうものを書いてくれないかと私に申し入れてきた。テーマはまあなんでもいいから、ということだった（ちなみに彼が挙げてくれた例は、「京都の印象、家族の逸話、日々の雑感、などなど」となっていた）。この「などなど」にほっとして、私はもちろん引き受けた。短信というのは願ってもない形式だし（私の元来のひどいおしゃべりにブレーキがかかるから）、人文研の優秀なメンバーの何人かと同じように、私はよくできた逸話や、日常生活の教訓的な小話や、なによりもプチ理論のたぐいに目がない。そこで、私は仕事にとりかかるかや、というより、こういうときにいつもやることをやってみる。つまり、最初の思いつきを、とっかかりとなるアイデアを、入り口となるポイントを、私は静かに待つわけだ。時間がたつだが思いつきも、とっかかりも、なにもやってこない。そうこ



うするうち、パリを訪れた康介と話をする機会があり、私の宿題について丁重に念を押された。それでもまだなにも思いつかないし、逸話が浮かんできそうな気配もない。プチ理論のプの字も出てこない。私は日本で一年間過ごしたが、私の人生でこれほど有意義だった年はおそらくそう多くない。この一年のあいだに、私は（人文研の優秀なメンバーたちに伍しながら）何十ものプチ理論を積み上げ、いつの日かなにか大きな理論のせめて半分だけでも書いてみたいという夢をぼんやりとあたためてくれた人文研（この意味で、私にすばらしい研究条件を与えてくれた人文研に感謝したい）、日常生活のこまごまとした場面から幾度となく教訓を得たし、そればかりか、私は半端でない数の子宝に恵まれたから、日本社会のもっともディープな場所である学校に足を踏み入れ、ＰＴＡやら「ママ友」やら「家庭訪問」の制度やらがどういうものであるのかを発見することができた。にもかかわらず、なにも。少なくとも、語るに値することはなにも出てこない。話のちょっとしたアイデアすらさっぱりである。まるで故障だ。よそで、いたるところで、起こっていることで、それなりに特別だと思えること、目にとまるとか、目立っていいるとか、あるいは変わっていると思えることが、なにひとつない。京都のことを書いてみたらどうか。もちろん、京都はユニークな街だ（ユニークでない大都市なんてあるのだろうか）。だが、私はもう京都で違和感を覚えることがまったくなく、その雰囲気に慣れ親しんでしまっているから、なにかに驚くようなこともない。だから主題にはならない。家族のことはどうだろう。たぶん、今回の滞在は私たちにとって決定的な経験だったけれど、それにまつわることがらはあまりに大事であると同時にあまりにありふれてもいて、ひとに語ってきかせるようなものではない。空気の肌理は、雨の激しさはどうか。研究室からじっと眺めることのできる東山のさまざまな色合いは（すばらしい研究環境を与えてくれた人文研にもういちど感謝）？そうしたことを語るのは、今朝のパリの曇り空や、ラスパイユ通りの生鮮食料品の市場に惹きよせられてくるカモメたちの、私の研究室からも聞こえる鳴き声について報告することより、ほんとうにおもしろいだろうか（ここでは関係のない話だが、現在すばらしい研究環境を与えてくれているシアンス・ポにこの場を借りて感謝したい）。日本のホモ・アカデミクスのことはどうだろう。京都におけるその変転は？　はっきりいって、私はそうしたことについてなにも知らないし、私の旅の印象はたいしておもしろくもない。人文研の同僚との研究上の関係や、その他の学術交流についてはどうか。そうした交流は優れた頭脳の集まるどんな卓越した機関においてもなされうるたぐいのものであるし、これらの頭脳たちによって拓かれた道の数々をわずかな紙幅で記述することなどできるはずもない。事務のスタッフたちの気遣い、親切、能力の高さについて書いてみるのは？　私にはどうも気の利いたことが言えそうにない。私が遭遇しないわけにはいかなかった言語の問題について語るのは？

それらの問題は、日本語で正しく自分を表現することができないせいでホストたちの驚くべき忍耐と感嘆すべき思いやりにどうしても甘えてしまうどんな外国人の訪問者も経験するたぐいのものにすぎない。友人とのつきあいについては？　これもまた、ほんとうの友人をもつ幸運に恵まれた人なら誰でもするようなつきあいだ。こうしたあてのない手がかりをかれこれもう何週間もたどってみているが、私の当惑は大きくなるばかりである。うろたえる気持ちを妻に打ち明けてみたが、彼女は頑固に無関心を決め込んでいる。（私はなににについて語るにも話題に困ることなどないと思われているのだ。）どうやらもう明白なことがらに降参するしかなさそうだ。人文研で過ごしたこの一年のあいだにほんとうに変わったこと、それは、日本のことが気に入れば気に入るほど、私は日本について話したくなくなってくる、ということなのだ。

（翻訳　立木康介）

講　演

夏期公開講座

悪名高き正史

――沈約『宋書』と魏収『魏書』――

藤井律之

沈約（四四一～五一三）が撰述した『宋書』、および魏収（五〇六～五七二）が撰述した『魏書』は、中国南北朝の劉宋と北魏（および東魏）を対象とした正史であるが、この二つは、中国の正史の中でもとりわけ評判が悪いものである。『魏書』は既に同時代人から「穢史」と呼ばれ、やや遅れるものの、『宋書』も唐代には「多妄」と評されている。

たとえ君主の過失であろうと直筆することが史官のあるべき姿と観念されていた時代に、沈約・魏収ともに権力者に追従し、また賄賂や個人的な好悪によって潤色したり必要以上に貶めるといった曲筆が悪評を呼んだ理由であった。

これら二つの正史には別の問題点もある。それは記述の密度である。

『魏書』の記述は非常に簡略で、改竄といってもよいレベルにある。北魏の皇室は非漢民族である拓跋鮮卑であり、そのため洛陽に遷都する以前の北魏には鮮卑語音写の官職が多数存在した。この事実は近年出土した石刻史料などによって確認することが出来るが、『魏書』には全く記されていないのである。

一方の『宋書』は、記述の繁雑さが批判の対象となることがある。両者の欠点とでも言うべき『魏書』の「簡」と『宋書』の「繁」をつきあわせてみると、興味深い事実が浮かび上がる。

北魏の石刻史料には時々「啓府儀同三司」なる官職が登場する。啓府儀同三司とは、後漢時代に置かれた開府儀同三司のことであるが、北魏においてのみ啓府儀同三司と表記される。また、特定家系の石刻史料のみに啓府儀同三司が登場するわけではないので、「開

府」を「啓府」とするのは、北魏皇帝の諱を避けるためであったことは明白なのだが、『魏書』に見える北魏皇帝には「開」を諱とするものはいないのである。

この問題を解決する糸口を与えてくれるのが、『宋書』の索虜伝である。「索虜」とは、中華意識にもとづく北方異民族への蔑称であり、バイアスがかかった史料とみなされ、くわえて正史『魏書』が存在することから、『宋書』索虜伝が北魏史の研究資料として取り上げられることはあまりないのだが、索虜伝は、北魏の初代皇帝・道武帝の諱を「開」としているのである。一般的に知られる道武帝の諱は「珪」であることから、索虜伝の「開」は「珪」の異訳と解する研究者もいるが、むしろ道武帝の本来の諱は「開」だったのであり、それが後代（おそらく北魏の第七代皇帝・孝文帝の時代）に「珪」へと改められたのではないかと推測してみた。

カフカスのとりこ

——トルストイ以後のカフカス山岳民の表象——

伊藤順二

レイトンがすでに指摘しているように、十九世紀ロシアの文学表象において、カフカスは特異な位置を獲得していた。プーシキンが旅行経験をもとに一八二二年に執筆した叙事詩『カフカスの虜』は、帝国への統合作業が進行中のカフカスに対する、最も人口に膾炙したイメージを創造した。主人公のロシア人軍人は軍事行動中に敵のチェルケス人の捕虜となり、最終的には彼に懸想した村の乙女の自己犠牲によって逃亡に成功する。幽閉中の描写においては、「高貴な野蛮人」的側面をもつムスリム系現地住民への、ロシア人の憧憬と同一化が描かれている。幾つかの語句に詳細な地誌的・民族誌的注釈をつけるというスタイルはバイロンを踏襲したものであるが、新占領地に対する観光案内的役割を果し、ロシア文学におけるカフカスものの小ブームの端緒となった。

そのカフカスに志願兵として赴いたのが二三歳のトルストイである。初期の作品である一八五二年の『侵入』には、自らの従軍の動機に対する反省的記述も散見される。「彼は、マルリンスキイやレールモントフの影響で、ジギート［勇士］を気取る青年将校の一人だった。」文学から得た知識で「タタール人」を模倣し、彼らに勇士と承認されようとする「カフカスかぶれ」の最終的な幻滅、カフカス幻想の消滅は、五五年の『森林伐採』で描かれている。

しかしカフカス現地住民に勇士と認められる描写は、七二年の『カフカスの虜』にも存在する。これは、上述したプーシキンの同名の叙事詩を、ちょうど五〇年後に、児童向けに改変を加えて再話した小説である。時計を自力で直せず、治療の狂言を信じてしまう現地住民と、捕虜となったロシア人軍人との文化的断絶はより強調され、同時に憧憬と同一化の欲望もより強く読みとりうる。この『カフカスの虜』は日露戦争期に日本語訳されているが、翻訳者は台湾の状況をこの小説に重ね合わせている。

一九九六年、トルストイの小説は、時代設定を現代のカフカスに変え、ポドロフによって映画化された。この『コーカサスの虜』や、政治的立場はポドロフの正反対に位置するバラバーノフの『チェチェン・ウォー』等の現代ロシア映画において、カフカスに対する一九世紀以来の両義的態度は、むしろ強化されている。

読まれなかった古典

——大唐西域記——

高田時雄

唐代初期、十七年の長きにわたってインドに滞在した玄奘三蔵がその滞在中の見聞および往復の旅程における知見に基づいて撰述した著作が大唐西域記である。当時のインドと中央アジアに関する豊富な情報を提供する史料として重んじられている。しかし余りにも有名なこの著作が、中国では決して古来大いに読み継がれたものではなかったことは注意に価する。古典にも色々なタイプがあり得ることは当然だが、この書物の場合は少し事情が異なる。

西域記は、玄奘の帰国後まもなく慌ただしく編纂され、翌貞観二十年（六四六）に太宗に呈上された。現存する諸本は刊本と写本とに分けられるが、そのほとんどが大蔵経の一部をなすもので、単行本は極めて少ない。そのテキストが完全なかたちで今日に伝えられたのは大蔵経に編入されたためである。しかし大蔵経は一般人の繙読には不便で、そのため西域記を読む人は決して多くなかった。明末にようやく単行本が出版されたものの、さして広く行われず、清朝には幾つかの叢書に収められたが、西域記の熱心な読者はそれほど増加しなかった。

ところが十九世紀ヨーロッパでは古代中国人の残した西域に関する記録が非常に大きな注目を浴びることになった。フランスのアベル・レミュザは法顕伝を翻訳して、この種の文献の利用に先鞭をつけたが、西域記もスタニスラス・ジュリアンによって仏訳され（一八五七～五八）、その後ビール（一八八四）、ワッターズ（一九〇四～五）よる英訳も相次いで出版された。

こういったヨーロッパの学者による翻訳や研究を通じて西域記の価値が中国で再評価されるようになると、次第に中国学者による研究が出現するようになる。カニンガムの研究（一八七一）に触発された丁謙「大唐西域記地理攷証」のような書物がその一例である。十九世紀末からヨーロッパやロシアの探険隊が盛んに中央アジアの考古調査を行ったときも、西域記は重要なガイドブックであり、かのオーレル・スタインの嚢中には常に西域記があった。敦煌蔵経洞で写本を入手するにあたり玄奘三蔵を振り回したことはよく知られている。日本でもヨーロッパ東洋学の影響を受けて、明治以来校訂本の出版や翻訳、研究が盛んに行われた。

病原菌と千里眼

——微生物学史のひとこまから

田中祐理子

一六世紀ヴェローナで活躍した医師にして詩人、ジローラモ・フラカストロ（一四七八—一五五三）は、「梅毒の命名者」および「病原菌理論の祖」として今日に名を残している。思想史上ではルネサンス後期の知識人にこの上もなくふさわしい人物像を示すように見えるフラカストロは、一方で医学史上では、時代に抜きん出た理論を着想した「千里眼者」として讃えられている。顕微鏡発明前夜に生き、決して細菌をその目で見ることがなかった彼が、「病原菌」の存在を「見通していた」とはいったいどのような事態なのか。それを理解するには、むしろ彼を「千里眼者」として見い出すこととなる歴史の動きの側、「微生物学史」三蔵法師の人気と相俟って、日本は世界有数の西域記尊重国である。かくして外国における西域記の評価が高まるとともに、中国でも本格的な研究が行われるようになり、今日では古典の名に相応しい読者を獲得しつつある。

の成立と展開とこそを考察することが要求されるだろう。

フラカストロを遙か遠くに立つ孤高の「祖」として賞賛したのは、二〇世紀初頭の微生物学者たちであった。このとき彼らにフラカストロを発見させたのは、一九世紀末に発展・確立した細菌学、病原微生物理論の知見にほかならない。一九世紀末から二〇世紀にかけてパストゥールとコッホらによって細菌病理学が実証され、この病理学が医学において決定的な地位を獲得した後に初めて可能になった科学的言説によってこの一六世紀の詩人の筆が読まれたとき、彼のいう「第一原因」たる「あの感覚不可能な粒子」、「伝染のたね（seminaria contagionum）と呼ばれる」存在は、今日私たちもよく知る極小の生物、細菌やウィルス以外を指すとは読めないほどのものになる。

しかし近年では、この二〇世紀の研究者たちのフラカストロ賛美は厳しい批判を受けるものとなった。フラカストロの記述を一六世紀の正統的知識人の最良の部類の文章として読むならば、彼の「病気のたね」という語は隠喩として当時の医学言語の網の目上に正確な位置を持つものであり、哲学史をさらに遙かに遡る「種子」の概念の、長く豊かな連なりへと繋がるものであることが明らかになる。現代の医学史家であるナットンは「フラカストロはロベルト・コッホではない」と述べて、二〇世紀におけるフラカストロ賞揚が、そのテクストを歴史的文脈から切り離し三世紀後の問題系の中で読解した時代錯誤の業であることを批判した。

このようなフラカストロの評価と微生物学の史的展開との関係から、私たちはどのような問題を受けとるべきなのか。フラカストロの言葉は二〇世紀の初めに、ある「革命的」科学の成立の興奮のために誤読されてしまった、それがこの事態のすべてなのだろうか。そうではなく、私たちはここでむしろ、フラカストロの言葉に対して、一九世紀の末に可視化された細菌が及ぼした効果を精査すべきではないか。視覚では決してとらえられなかった存在を思弁によって現前させたフラカストロの「人間的」な作業の産物である一つの像が、顕微鏡写真という技術（これこそは微生物学の方法論的確立の条件として、コッホが強調したものであった）の可能にする像によって、一六世紀という文脈から突如簒奪されることになった。そこには「言葉」と「もの」の、そしてそこに立ち働いている界面としての「人間」にとっての、歴史的一場面の到来を見るべきであろう。

韓国の世界遺産・宗廟の歴史

矢木　毅

ソウルの地下鉄一号線、鍾路三街駅から東に少し歩いたところに「宗廟」がある。宗廟とは王室の祖先神を祀る霊廟のことで、これは王国の土地神・穀物神を祀る「社稷」とともに、王朝国家の最も重要な祭祀施設として位置づけられていた。『周礼』冬官、考工記、匠人の条に見える「左祖右社」のプランに従って、朝鮮王朝では王宮（景福宮）の左（東）に宗廟（祖）を建て、右（西）に社稷（社）を建てていたのである。

中国の皇帝から冊封を受けた「諸侯」の国である朝鮮では、『礼記』王制篇に見える「天子七廟」、「諸侯五廟」の制度に従って、当初、五室の宗廟を建てた。本来、それぞれの祖先神には個々に独立した霊廟を建てなければならないが、中国では後漢の明帝以後、経費節減の意味もあって後嗣の廟は建てず、これを太廟（太祖の廟）に併せ祀っている。朝鮮でもこの「同堂異室」の制度を採用して、太祖以下の歴代の国王の位牌を宗廟内部の五室に奉安していたのである。

ところで、五百年の歴史をもつ朝鮮王朝においては、国王の位牌は当然「五室」では収まりきらない。世代の遠ざかった国王の位牌は、「百代不遷」の太祖以外、順次、宗廟から祧遷して「永寧殿」と呼ばれる別廟の翼室に奉安されることになっていたが、特別に功績のあった国王は、「世室」と称してそのまま宗廟の祭祀を受け続けることになった。このため、後代ではさまざまな事情から「世室」が濫造され、王朝末期の宗廟は「五室」どころか「十九室」を抱える長大な建物に増築されて今日に至っている。

講演会当日はこの「世室」の問題――特に宋時烈の廟制改革議論――を取り上げて、それを糸口に「王権」をめぐる当時の士大夫社会の理念的な対立（党争）の性格にまで議論を推し進める予定であったが、時間的な制約もあって、ほとんど観光案内程度の話に終始してしまった。

私が始めて宗廟を訪れたのは人文研の助手に採用されて二年目の一九九四年の夏。日盛りの宗廟には訪れる人影もなく、敷石の隙間からは夏草が茫茫と生えて、そぞろに黍離・麦秀の感を受けたものだ。ところが先だって、久しぶりに春浅い宗廟を訪れてみると、ところどころに少し残っている雪で盛んに遊んでいる社会

学習の小学生の団体やら、折からのウォン安で殺到した日本人観光客やらで大層な賑わいである。世界遺産の指定が一九九五年、それから随分と整備も進んでいる。歴史は常に生まれ変わっていく――そんな当たり前のことを改めて実感した。

二〇〇八年度人文科学研究協会賞　受賞記念講演

中国抗戦時期木刻運動の一側面

――日本占領下の木刻運動

（日中藝術研究会代表）
三山　陵

魯迅（一八八一―一九三六）は、上海に移り住んだ一九二七年以降、新しい美術として「木刻（木版画）」を積極的に紹介した。木刻は油絵や国画のように高額な材料は不要だし、道具は簡便で場所を選ばず制作でき、しかも複数刷ることができる。大衆に近く、時代に相応しいメディアとして、魯迅は木刻の創作を青年に推奨した。一九三一年夏には、内山完造の弟・嘉吉を講師に招き版画講習会を開いた。外国版画を複製したり版画展を開催し、美術青年を熱心に育てた。

その甲斐あって、一九三五年には「全国木刻流動展」が各地を巡回、翌年は第二回展が開催された。第三回展は開催まぢかに日中戦争が始まって中断した。木刻青年たちは「彫刻刀を武器」に抗日戦を闘うことになった。白黒のはっきりした木刻は大衆の目を引く

に十分であった。物資が不足するなかで、手作りポスターや挿図としても力を発揮した。

延安には魯迅藝術学院が創設され、多くの優れた版画家が育った。国民党統治区でも通信教育などで版画家が養成され、全国的な版画団体も結成された。建国後は、抗日戦における美術活動の主流となった版画家たちが中心となって新中国の美術界をつくっていく。

このように、抗日期における木刻運動の輝かしい姿はよく知られるが、実は日本占領地域においても同じような「運動」が存在したことは知られていない（あるいは無視されていた）。これは日中戦争期の木刻運動を原資料に基づいて構築する過程で明らかになったものだが、当初は、「抗日の象徴」である木刻が、日本占領下でも制作されていたとはにわかには信じられなかった。そのうえ仔細に資料を検証すると、この運動は日本側（あるいは国民党和平派）の主導下に組織され展開されたのである。青年が崇拝してやまない魯迅と彼が提倡した木刻が「和平派文化工作」に取り込まれていたといえよう。

北京・天津における木刻活動は、美術教師の王青芳が中心であった。彼は第一回木刻流動展に出品した木刻家である。仲間の木刻青年たちが抗日のために北京を離れても、彼らほど若くない王青芳は北京を離れなかった。

王青芳は一九三九年九月、『華文大阪毎日』（半月刊）に「北京画壇の怪傑」として紹介され、その後は木刻作品が毎号掲載された（『華文大阪毎日』は一九三八年に、日本の国策宣伝を目的として創刊された中国語雑誌で、一九四五年まで続いた）。木刻制作を紹介する木刻講座も執筆した。この連載は人気があったらしく、筆者が閲覧した同誌には木刻講座が切り取られた号が散見された。同誌には読者が投稿した木刻も掲載されはじめ、木刻愛好者が育っていたことがうかがえる。

上海・南京の木刻活動は、汪兆銘政府の宣伝科に所属する漫画家・王迎暁が中心であった。日本人版画家・田川憲が一九四一年早春に上海に渡り、彼と連携して版画活動を開始する。まず版画講習会を開いて愛好者を募り、一九四二年秋に中国木刻作者協会を設立する。設立大会にあわせて版画集『木刻新風』を出版するが、これには魯迅と親交があった内山完造が関係していた。協会設立後は、『中国木刻』という機関誌を数号出したが、これらの活動は、上海日本総領事館特別調査班の支援を受けていたと考えられる。

日中戦争以前の広東・広州市は、新興版画運動にとって重要拠点であった。広州市立美術学校の教師・李

樺が率いる現代版画会（一九三四年に創設）には優秀な作者が多く、活発に活動していた。版画誌『現代版画』や『木刻界』を発行し、各地の木刻グループと連絡を取り合って全国木刻流動展を成功させている。日中戦争が始まると、李樺をはじめほとんどの会員は、抗日戦を闘うために内地へあるいは香港へ向った。

広州での和平派文化工作は一九四三年秋に始まった。木刻講習会や展覧会が開かれ、一九四五年二月には漫画・木刻専門誌『漫木界』（月刊）が創刊される。この活動に現代版画会の元会員が動員された。『漫木界』は、李樺が主張した木刻理論を述べ、李樺の木刻指導書をそのまま流用した技法解説を載せている。独自の版画論を表す力量はなかったようだ。

日本・神戸の華僑に対しても和平派文化工作が行なわれた。中心人物は、『華文大阪毎日』が初めて掲載した投稿木刻の作者、李平凡である。彼は一九四三年に神戸中華同文学校の教員として来日し、華僑を対象に版画活動を始めた。李は、戦時体制のもと出版物の検閲が強化され、紙の使用が制限されていたにもかかわらず、版画愛好者の作品集を出版している。彼は、兵庫県庁の華僑担当者に懐柔されていたと推測できる事実がある。

日本占領下の木刻運動は、抗日勢力が力強く展開したそれとは比較にならないほど、規模においてもその実効性においても、小規模で脆弱なものであった。大東亜共栄圏建設のスローガンのもとに、「金と権力」で寄せ集めた組織から生み出される作品には、内から湧き出るエネルギーがほとんど感じられない。

高邁な政治スローガンとは無関係に、美術としての木刻が本当に好きで制作に励む作者が見受けられたのも事実である。残念ながら、それは単なる趣味的な愛好者の枠を出でず、社会性が不足して訴求力も弱い。

結果的に、和平派文化工作の木刻運動は、青年の心をとらえて彼らを目標に導くまでに至らなかった。しかしながら、未来が予測できない戦時下の不透明な状況下で、懸命にこの事業に従事した人々もいたことは、歴史に記録しておくべきであろう。

附記

このたび二〇〇八年度人文科学研究協会賞を授与いただきましたことを、日中藝術研究会を代表して衷心から感謝申し上げます。日中藝術研究会は、一九八五年に日中の聾唖児童の版画交流を橋渡したことを機に結成された団体です。結成以来、中国版画や民間美術の紹介・研究を中心に活動してきました。

在野の地味な活動に関心を持っていただき、高く評価していただきましたことをたいへん光栄に感じています。受賞を励みとして、今後も活動を続けていきたいと思います。

本稿は受賞記念講演の梗概ですが、詳細は『中国抗日戦争時期新興版画史の研究』（研文出版、二〇〇七年）をご覧ください。また、この続編である『戦後東アジアにおける中国新興版画の伝播と受容』（仮題）を出版準備中であることも申し添えます。

彙報

おくりもの

・宮紀子助教は日本学術振興会賞を受賞（二〇〇九年三月九日付）
・宮紀子助教は日本学士院学術奨励賞を受賞（二〇〇九年三月九日付）
・岡田暁生准教授は芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞（二〇〇九年三月十六日付）

人のうごき

・谷川穣（人文学研究部）助教は、大学院文学研究科准教授に昇任（四月一日付）。
・小野寺史郎氏を助教（附属現代中国研究センター）に採用（四月一日付）。
・高井たかね（附属漢字情報研究センター）助教を東方学研究部に配置換（四月一日付）。
・袁広泉大学共同利用機関法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター、四月一日～二〇〇九年三月三一日）。
・VITA, Silvio イタリア国立東方学研究所所長は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇九年三月三一日）。
・JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、八月一日～二〇〇九年三月三一日）。
・小林善文神戸女子大学文学部教授は、特任教授（十月一日～二〇〇九年三月三一日）。
・黒岩康博氏を助教（人文学研究部）に採用（十月十六日付）。
・曽布川寛（東方学研究部）教授は定年により退職（二〇〇九年三月三一日付）。
・坂本優一郎（人文学研究部）助教は辞任の上（二〇〇九年三月三一日付）、関西大阪経済大学専任教育職員（講師）に就任。
・倉島哲（人文学研究部）助教は辞任の上（二〇〇九年三月三一日付）、関西学院大学社会学部専任講師に就任。

海外での研究活動

・高木博志准教授（人文学研究部）は、大学運営費により、四月三日大阪発、ハイアット・レージェンシーホテルに於いてアジア学会に出席及び報告を行い、四月八日帰国。
・李昇燁助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金及び京都大学教育研究振興財団助成金により、四月三日常滑発、ハイアット・レージェンシーホテルに於いて米国アジア学会年次大会に出席及び報告、UC Berkeley に於いて東アジア図書室所蔵の近代日本・朝鮮関係の文献調査及び閲覧を行い、四月十一日帰国。
・船山徹准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月二二日大阪発、中山大学、韶関市周辺、香港大学に於いて仏教関係研究打合せ及び仏教関係遺跡調査を行い、四月三十日帰国。

・古勝隆一准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月二二日大阪発、中山大学、韶関市周辺、香港大学に於いて仏教関係研究打合せ及び仏教関係遺跡調査を行い、四月三十日帰国。
・高田時雄教授（東方学研究部）は、四月二十日大阪発、Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, Russian Academy of Sciences; St. Petersburg State University に於いて西域及びシルクロードの社会と文化に関する連続講義を行い、五月二日帰国。
・加藤和人准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、四月二八日大阪発、The Westin Hotel in Calgary に於いて International GE3LS Symposium 二〇〇八に参加及び口頭発表、Renaissance Hotel Cleveland に於いて Translating ELSI に参加及び口頭発表を行い、五月六日帰国。
・冨谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月十八日大阪発、ライデン大学に於いてシンポジウム（礼儀と正義）の打合せを行い、五月二二日帰国。
・大浦康介教授（人文学研究部）は、三月二日大阪発、パリ第七大学に於いて講演及び共同研究参加を行い、五月三一日帰国。
・加藤和人准教授（人文学研究部）は、受託研究費により、六月十日大阪発、Pennsylvania Convention Center に於いて 6th ISSCR に出席し、ポスター発表を行い、六月十六日帰国。
・麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月十九日大阪発、四川省社会科学院において「道藏輯要」のテキスト、マークアップに関する中国側研究協力者との研究打合せ行い、六月二四日帰国。
・加藤和人准教授（人文学研究部）は、受託研究費（一部先方負担）により、六月二二日大阪発、Human Fertilisation and Embryology Authority に於いて iPS 細胞研究の倫理的課題に関する資料収集及び意見交換を行い、St. Anne's College に於いて Governing Genetic Databases Project Int. Conference June 二〇〇八に参加、口頭発表及び iPS 細胞研究の倫理的課題に関する資料収集を行い、六月二八日帰国。
・森時彦教授（東方学研究部）は、共同研究費（一部先方負担）により、七月一日大阪発、北京大学に於いて学術講演及び研究打合せを行い、七月六日帰国。
・ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、七月二日大阪発ハイデルベルグ科学院に於いてシンポジウム Buddhist Epigraphy in China に出席及び研究報告を行い、七月八日帰国。
・田中淡教授（東方学研究部）は、五月十六日大阪発、ハイデルベルグ大学芸術史研究所に於いて中国建築史に関するセミナーに参加、講義を行い、六月十六日用務終了、七月十日帰国。
・船山徹准教授（東方学研究部）は、六月十八日大阪発、ハイデルベルグ学術アカデミーに於いて共同研究「中国仏教石経」参加および研究集会での発表を行い、七月十五日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十七日成田発、ハーバード大学において人種に関する共同研究打合せ、ニューヨーク大学及びカリフォルニア大学に於いて国際シンポジウム打合せを行い、七月二三日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、七月十五日大阪発、Institute of Oriental Studies, St. Petersburg Branch, Russian Academy of Sciences; St. Petersburg State University に於いて「十九世紀末～二十世紀初におけるロシアの中央アジア探検」研究プロジェクトに関する助言を行い、七月二五日帰国。

。石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）は、受託研究費により、七月十七日大阪発、洛陽師範学院に於いて中国近現代史研究打合せ及び第三回中国近代史思想史国際学術シンポジウム出席、河南大学図書館に於いて中国社会主義運動に関する資料調査、河東博物館に於いて中国近現代史資料調査を行い、七月二六日帰国。

。山崎岳助教（附属漢字情報センター）は、七月二三日大阪発、杭州市内に於いて杭州市内史跡調査、杭州工商大学に於いて国際シンポジウムに参加、研究発表、船山博物館等に於いて定海区史跡調査、馬墓港等に於いて帯海港調査を行い、八月一日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、七月二七日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて「東亜文化意象之形塑」講演及び座談会に参加し、八月二日帰国。

。船山徹准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、七月二八日大阪発、白馬寺に於いて仏教史夏期集中講義および資料収集を行い、八月十六日帰国。

。田辺明生准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月一日大阪発、ブバネーシュワルおよびプリー近郊に於いて民主化にともなう社会変容についてのフィールド調査を行い、八月十九日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、七月三十日大阪発、中央民族大学に於いて西南中国の言語にかんする文献調査し、西南民族大学に於いてムニャ語とリュズ語の調査を行い、八月二十日帰国。

。曽布川寛教授（東方学研究部）は、八月十七日大阪発、青海省文物考古研究所、塔尔寺、薩迦寺、夏魯寺等に於いてチベット仏教美術に関する現地調査、資料蒐集を行い、八月二七日帰国。

。小野寺史郎助教（附属現代中国研究センター）は、共同研究費により、八月二三日大阪発、上海図書館等に於いて近代中国に関する資料収集を行い、九月二日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、七月十五日大阪発、カールスルー大学に於いて仏教年表について研究打合せ、オスロ大学に於いて禅学ワークショップに参加、ライデン大学に於いて Leiden Symposium "Ritual, Art And Justice" に出席し、九月五日帰国。

。冨谷至教授（東方学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、八月三十日大阪発、国際シンポジウム「東アジアにおける礼と正義」打合せ及びシンポジウム開催を行い、九月五日帰国。

。矢木毅准教授（東方学研究部）は、京都大学教育振興財団助成金により、八月三十日大阪発、国際シンポジウム「東アジアにおける礼と正義」打合せ及びシンポジウム開催を行い、九月五日帰国。

。石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）は、九月三日大阪発、国立博物館、チュラロンコン大学に於いてタイ移民史に関する調査、ディウ博物館に於いてポルトガル統治に関する調査、マニ・バワンに於いてインド独立運動史に関する調査を行い、九月十二日帰国。

。王寺賢太准教授（人文学研究部）は、大学運営費（一部先方負担）により、七月三一日大阪発、ライデン大学に於いて Scaliger Institute Scaliger Fellow として調査研究行い、パリ国立図書館及び国立古文書館に於いて資料調査を行い、九月十六日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月一日大阪発、École Normale Supérieure に於いて資料・文献収集を行い、九月十六日帰国。

。小野寺史郎助教（附属現代中国研究センター）は、九月十二日大阪発、上海市図書館等に於いて資料収集を行い、復旦大学に於いて復旦大学リベラリズム、・ワークショップに参加し、九月十七日帰国。

。田辺明生准教授（人文学研究部）は、九月十三日大阪発、アジスアベバ市内等に於いてエチオピアの在来知に関するスタディツアー、Harari Cultural Center Hall に於いて国際ワークショップに討論者として出席し、九月二二日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十四日大阪発、大英博物館に於いてチベット文献資料収集、ロンドン大学に於いて第四一回国際鑑蔵言語学会に参加し、九月二三日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、九月二二日常滑発、南開大学に於いて講義及び講演を行い、九月二八日帰国。

。岡田暁生准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二六日大阪発、ライプチッヒ音楽大学に於いて、ドイツ音楽学会国際大会出席及びシンポジウム発表を行い、十月三日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十月一日大阪発、Collège de France に於いて「ポール・ペリオ：歴史から伝説へ」国際シンポジウム出席、Bibliothèque Nationale に於いて敦煌写本の調査を行い、十月七日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、十月十五日大阪発、ソウル大学に於いて第一回奎章閣韓国学国際シンポジウム出席及び論文発表を行い、十月十九日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方

負担）により、十月二三日大阪発、南華大学、佛光山に於いて佛教文献與文学国際学術検討会に出席、台湾国家図書館に於いて表音文学書写中国語文献の調査を行い、十月二八日帰国。

◦田中雅一教授（人文学研究部）は、十月二一日大阪発、エジンバラ大学、スターリング大学、アバディーン大学、グラスゴー大学、ランカスター大学、バース・スパ大学、ロンドン大学に於いて英国における宗教教育の調査を行い、グランストンベリー市内に於いて多文化と宗教実についての調査を行い、十一月一日帰国。

◦山室信一教授（人文学研究部）は、十月二九日大阪発、中央研究院台湾史研究所に於いて国際学術検討会出席及び史料調査、台湾大学人文社会高等研究院に於いて講演を行い、十一月二日帰国。

◦立木康介准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二三日成田発、ワシントンDC市内及び議会図書館に於いて「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み」のための資料収集を行い、十一月二日帰国。

◦水野直樹教授（人文学研究部）は、十月二九日大阪発、中央研究院・台湾史研究所に於いて、「日本帝国植民地之比較研究」国際学術検討会に参加、報告及び台湾植民地支配関係資料調査を行い、十一月三日帰国。

◦李昇燁助教（人文学研究部）は、十月二九日大阪発、中央研究院・台湾史研究所に於いて、「日本帝国植民地之比較研究」国際学術検討会に参加、発表及び台湾植民地支配関係史料調査を行い、十一月三日帰国。

◦坂本優一郎助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月十三日大阪発、英国図書館、ナショナル・アーカイヴズに於いて十八世紀イギリスの証券投資関係史料の調査を行い、十一月七日帰国。

◦高田時雄教授（東方学研究部）は、十一月三日大阪発、首都師範大学に於いて講学を行い、十一月九日帰国。

◦池田巧准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十一月一四日大阪発、Bethesda North Marriott Hotel & Conference Center に於いて「国際がんゲノムコンソーシアム第一回ワークショップ」に出席し、十一月十九日帰国。

◦岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十五日大阪発、遼寧省博物館に於いて北魏出土文物の調査、北塔博物館に於いて思燕寺出土文物の調査、中国社会科学院考古研究所に於いて調査成果の意見交換を行い、十一月二二日帰国。

◦稲葉穣准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十一月十六日大阪発、ウィーン市内に於いて中央アジア宗教史に関する研究打合せ、文化歴史博物館に於いて国際学会 Iranian Huns and Western Turks に出席、研究発表を行い、十一月二二日帰国。

◦田辺明生准教授（人文学研究部）は、十一月十七日大阪発、ヒルトン・ホテルに於いてアメリカ人類学会一〇七回大会出席し、十一月二五日帰国。

◦池田巧准教授（東方学研究部）は、共同研究費により、十一月二十日大阪発、中央研究院語言研究所に於いて四川蔵緬語国際検討会に参加、十一月二五日帰国。

◦向井佑介助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十五日大阪発、遼寧省博物館に於いて北魏出土文物の調査、北塔博物館に於いて思燕寺出土文物の調査、中国社会科学院考古研究所に於いて調査成果の意見交換を行い、十一月二二日帰国。

◦稲葉穣准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十一月十六日大阪発、ウィーン市内に於いて中央アジア宗教史に関する研究打合せ、文化歴史博物館に於いて国際学会 Iranian Huns and Western Turks に出席、研究発表を行い、十一月二二日帰国。

◦田辺明生准教授（人文学研究部）は、十一月十七日大阪発、ヒルトン・ホテルに於いてアメリカ人類学会一〇七回大会出席し、十一月二五日帰国。

◦池田巧准教授（東方学研究部）は、共同研究費により、十一月二十日大阪発、中央研究院語言研究所に於いて四川蔵緬語国際検討会に参加、十一月二五日帰国。

◦ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、十一月十九日常滑発、ハーバード大学に於いて Biographical Database Workshop に出席及び研究報告を行い、十一月二六日帰国。

◦岡田暁生准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十一月二二日大阪発、ドレスデン音楽大学に於いて第一次世界大戦の現代世界の成立に関する越領域的研究に関する資料収集、講義、音楽文化に関する資料収集を行い、十一月二八日帰国。

◦小野寺史郎助教（附属現代中国研究センター）は、共同研究費（一部先方負担）により、十一月二七日大阪発、中山大学に於いて第二回「近代知識与制度体系転型」学会出席及び資料調査を行い、十二月一日帰国。

◦石川禎浩准教授（附属現代中国研究センター）は、受託研究費（一部先方負担）により、十一月二七日大阪発、中山大学に於いて第二回「近代知識与制度体系転型」学会出席及び資料調査を行い、十二月一日帰国。

◦籠谷直人教授（人文学研究部）は、十二月三日大阪発、Inha University に於いて国際シンポジウム「居留地研究」に参加、報告を行い、十二月六日帰国。

◦山﨑岳助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月一日大阪発、湄州媽祖祖廟、泉州市博物館、海交史博物館等に於いて東アジア海域交流史関係史料調査を行い、十二月八日帰国。

◦ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、十二月二日大阪発、ハイデルベルグ科学院に於いて PNC 国際学術会議に出席、研究報告を行い、十二月八日帰国。

◦冨谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月五日大阪発、ライデン大学に於いて本年度開催のシンポジウム報告書作成、来年度シンポジウムの協議、ハンブルグ大学に於いて出土文学資料研究に関する打合せ、ミュンスター大学に於い

て二国間共同研究の進め方に関する協議を行い、十二月十一日国。

。菊地暁助教（人文学研究部）は、十二月十一日大阪発、国立民俗博物館に於いて二〇〇八年度韓国民俗学会国際学術大会報告、河回村に於いて「文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較研究」現地調査及び資料調査を行い、十二月十七日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、十二月八日大阪発、Institute of Oriental Manuscrips, Russian Academy of Sciences に於いてロシア探検隊収集「西域出土の文献―文字の文化史―」展のための予備調査を行い、十二月十九日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、受託研究費により、十二月十日常滑発、コロンボ大学に於いて災害と環境についての調査を行い、十二月二二日帰国。

。久保昭博助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部私費）により、十二月十一日大阪発、パリ市内及びフランス国立図書館に於いて第一次大戦関連資料調査を行い、十二月二三日帰国。

。李昇燁助教（人文学研究部）は、十二月二五日大阪発、国家記録院に於いて朝鮮植民地支配と李王家に関する資料調査を行い、十二月三一日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究部）は、受託研究費により、二〇〇九年一月五日大阪発、The California Institute for Regenerative Medicine 及び Harvard Stem Cell Institute に於いてアメリカにおける新 iPS 細胞活用の調査研究に関する社会倫理、ガイドラインの情報交換及び調査を行い、二〇〇九年一月十一日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年一月十三日大阪発、重慶市図書館及び上海図書館に於いて複数文化接触に関する文献踏査を行い、二〇〇九年一月十八日帰国。

。山﨑岳助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年一月六日大阪発、石浦港等に於いて南中国の漁業および漁民社会に関する調査、船山図書館に於いて南中国の漁業と漁民文化に関する資料収集等を行い、二〇〇九年一月二十日帰国。

。倉島哲助教（人文学研究部）は、二〇〇七年一月二三日大阪発、マンチェスター大学に於いて客員研究員として調査研究を行い、二〇〇七年十二月十四日一時帰国。二〇〇七年十二月二一日再出国、マンチェスター大学に於いて客員研究員として調査研究。二〇〇八年七月二五日再度一時帰国、二〇〇八年八月十二日再出国、マンチェスター大学に於いて客員研究員として調査研究及び太極拳センターにて現地調査を行い、二〇〇九年一月二二日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年一月七日大阪発、コロンボ大学に於いて宗教マイノリティについての調査を行い、二〇〇九年一月二四日帰国。

。小池郁子助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年一月二九日大阪発、ペッカム

区域ナイジェリア人共同体に於いて宗教的活動、民族団体に関する資料文献収集及び実地調査を行い、二〇〇九年二月十三日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、二〇〇九年二月十日大阪発、仁荷大学韓国研究所に於いて連続講義・質疑及び資料調査を行い、二〇〇九年二月十六日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年二月十日大阪発、イリンジャラクダ村及びパンニャール村に於いてヴェーダ伝承及び写本の調査を行い、二〇〇九年二月二一日帰国。

。矢木毅准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年二月二十日大阪発、国立中央図書館に於いて近世朝鮮時代の政治文化に関する資料収集を行い、二〇〇九年二月二三日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、二〇〇九年二月二二日大阪発、中央研究所に於いて TELDAP 二〇〇九国際会議に出席、研究報告を行い、二〇〇九年二月二八日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年二月二三日大阪発、国立博物館に於いて仏教関連文物の調査、サーンチー寺院に於いてストゥーパの調査、マトゥラー博物館に於いてマトゥラー出土文物の調査、インド博物館に於いて仏教関連文物の調査を行い、二〇〇九年三月九日帰国。

。向井佑介助教（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年二月二三日大阪発、国立博物館に於いて仏教関連文物の調査、サーンチー寺院に於いてストゥーパの調査、マトゥラー博物館に於いてマトゥラー出土文物の調査、インド博物館に於いて仏教関連文物の調査を行い、二〇〇九年三月九日帰国。

。李昇燁助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年三月一日大阪発、中央研究院・台湾研究所に於いて日本の台湾統治と人種論に関する文献調査を行い、二〇〇九年三月十日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、受託研究費により、二〇〇九年二月二八日大阪発、マドラス大学に於いて被災地の環境問題についてのデータ収集を行い、二〇〇九年三月十二日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇九年三月九日大阪発、Ecole Normale Supérieure に於いて「ひと概念の再構築をめざして―人文科学・アート・医療をつなぐ問いかけ」プロジェクトのための資料・文献収集を行い、二〇〇九年三月十九日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、二〇〇九年三月十九日大阪発、高麗大蔵研究所に於いて学術会議に出席、論文を宣讀し、二〇〇九年三月二二日帰国。

。田辺明生准教授（人文学研究部）は、二〇〇九年三月十三日大阪発、Martin Chautiari に於いてネパールフィールドスクール・オリエンテーション及び講義、CDO（NGO）及び周辺地域に於いてネパールフィールドスクール・フィールド演習を行い、二〇〇九

年三月二三日帰国。

◦藤井正人教授（人文学研究部）は、受託研究費により、二〇〇九年三月十九日大阪発、トリチュール近郊に於いてヴェータ伝承地におけるインド伝承医学の調査を行い、二〇〇九年三月二六日帰国。

◦王寺賢太准教授（人文学研究部）は、二〇〇九年三月十四日大阪発、国際哲学コレージュに於いて人文科学研究所と国際哲学コレージュとの協定に基づき、研究者交流、講演等の実施を行い、二〇〇九年三月三十日帰国。

外国人研究員

◦牟　發松　華東師範大学歴史系教授
石刻資料から見た漢唐間の地方社会及びその国家との関係
（文化生成研究客員部門）
受入教員　冨谷教授
期間　八月二十日～
二〇〇九年二月十九日

◦STERLING, Marvin Dale　インディアナ大学ブルーミントン校人類学部准教授
アフリカ人ディアスポラを超える黒人性の表象：東アジアの場合
（文化連関研究客員部門）
受入教員　竹沢教授
期間　十月一日～十二月三一日

◦汪　朝光　中国社会科学院近代史研究所・研究員（民国史研究室・主任）
中国映画における抗日戦争の記憶
（文化連関研究客員部門）
受入教員　森教授
期間　二〇〇九年一月五日～
二〇〇九年七月四日

◦田村恵子　オーストラリア戦争記念館豪日研究プロジェクトプロジェクトマネージャー
日豪の戦争の記憶におけるナショナリズムとトランスナショナリズム
（文化生成研究客員部門）
受入教員　田中雅一教授
期間　二〇〇九年二月二十日～
二〇〇九年五月二七日

招聘外国人学者

◦ESPOSITO, Monica
道蔵輯要の研究
受入教員　麥谷教授
期間　二〇〇六年四月一日～
二〇〇九年三月三一日（継続）

◦余　欣　復旦大学歴史学系副教授
日本所藏博物学漢籍研究
受入教員　高田教授
期間　二〇〇七年九月二五日～
二〇〇九年九月二四日（継続）

◦高　啓安　蘭州商学院教授
中国におけるシルクロード飲食文化の研究
受入教員　高田教授
期間　二〇〇七年十一月二十日～
二〇〇九年十一月十九日（継続）

◦ANDERL, Christoph University of Oslo, Post-doctoral research fellow; senior lecturer Research on Chan-Buddhist language and literature in the Tang and Song periods
受入教員　ウィッテルン准教授
期間　三月十九日～六月十二日

◦王　三慶　国立成功大学中国文学系教授
漢語四聲與詩律、音樂之關涉研究
受入教員　高田教授
期間　六月二十日～八月十九日

◦王　永平　首都師範大学歴史学院教授
東西方文明的互動與唐代文化的走向
受入教員　高田教授
期間　九月十二日～九月二八日

◦顔　娟英　台湾・中央研究院歴史語言研究所研究員
武周時期佛教藝術
受入教員　曽布川教授
期間　十一月十二日～十二月十一日

◦林　炳徳　忠北大学校人文大学史学科教授
中国法制史の研究
受入教員　冨谷教授
期間　一二月二二日～
二〇〇九年十二月二一日

◦鞏　文　中国社会科学院考古研究所副研究員
三～六世紀の装身具からみた東アジアの文化交流
受入教員　岡村教授
期間　十二月五日～
二〇〇九年三月五日

◦李　玠奭　国立慶北大学校教授
日本における元代法制史研究動向の調査
受入教員　水野教授
期間　四月一日～四月三十日

◦JAMI, Catherine Florence CNRS・Chargee de recherche
梅文鼎の中西数学研究とその科学思想
受入教員　武田教授
期間　四月一日～四月三十日

◦CULLEN, Christopher Needham Research Institute, Director
中国古代の数学、数理天文学
受入教員　武田教授
期間　四月一日～四月三十日

◦房　德鄰　北京大学歴史系教授
中国近代文化史
受入教員　森教授
期間　四月十日～六月九日

◦廖　幼華　国立中正大学歴史系教授
唐代南選地區的地域性差異——時間與空間的動態研究
受入教員　高田教授
期間　四月十五日～五月十四日

◦柳　楊善　カトリック大学校人文学部教授
日本におけるユン・ドンジュ（尹東柱）研究動向に関する調査
受入教員　水野教授
期間　四月一日～四月三十日

外国人共同研究者

◦SCHERRMANN, Sylke, Ulrike
青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査
受入教員　岩井教授
期間　二〇〇六年一〇月一日～
二〇〇九年三月三一日（継続）

・烏　蘭
清代のモンゴル史――満洲族とモンゴル族の関係を中心に
受入教員　岩井教授
期間　四月一日～
二〇〇九年三月三一日

・MURPHY, Regan Harvard University, PhD student
江戸時代の仏教と国学の関係の再評価（契沖・富永仲基・慈雲）
受入教員　高木准教授
期間　六月十五日～八月一日

・魯　相豪　プリンストン大学東アジア研究科・博士課程
日本帝国の都市計画と植民地中産階級の政治動員――京城を中心に――
受入教員　水野教授
期間　九月二四日～
二〇〇九年八月三一日

・SAVELYEVA, Anna　エルミタージュ美術館東洋部研究員
一八九一年ニコライ訪日と有栖川官邸
受入教員　高木准教授
期間　十月十三日～十月二三日

外国人研究生

・安　鍾洙
身体によるハーフへの他者化と、その変動
受入教員　田中教授
期間　十月一日～
二〇〇九年三月三一日

・MCDONALD, Kate
日本帝国における観光
受入教員　水野教授
期間　十月十四日～
二〇〇九年十月十三日

漢字情報研究センター講習会

・二〇〇八年度漢籍担当職員講習会（初級）
第一日（十月六日）
オリエンテーション　森　時彦
漢籍について　井波陵一
カードの取り方――漢籍整理の実践　梶浦　晋
第二日（十月七日）
工具書について　永田知之
漢字目録カード作成実習
第三日（十月八日）
目録検索とデータベースの検索　安岡孝一
漢籍データ入力実習（一）
第四日（十月九日）
和刻本について
慶応義塾大学附属研究所斯道文庫　准教授　高橋　智
漢籍データ入力実習（二）
第五日（十月十日）
朝鮮本について　矢木　毅
実習解説　山﨑　岳
情報交換・質疑応答　井波陵一

・二〇〇八年度漢籍担当職員講習会（中級）
第一日（十一月十日）
オリエンテーション　森　時彦
経部について
文学研究科准教授　宇佐美文理
叢書部について　高井たかね
叢書と漢籍データベース　安岡孝一
第二日（十一月十一日）
史部について　藤井律之
漢籍データ入力実習（一）
第三日（十一月十二日）

子部について　武田時昌
漢籍データ入力実習（二）
第四日（十一月十三日）
集部について
人間・環境学研究科准教授　道坂明廣
漢籍データ入力実習（三）
第五日（十一月十四日）
実習解説　山﨑　岳
現代中国書について
神戸大学大学院人文研究科准教授　濱田麻矢
情報交換・質疑応答　井波陵一

お客さま

四月二二日　中国教育部語言文学応用研究所教授　費錦昌、中国華東師範大学教授　徐莉莉（金、安岡が対応した）

六月十日　中国社会科学院図書館代表団　中国社会科学院図書館副館長　趙燕平他二名（森、井波、武田、安岡、ウィッテルン、石川、袁、守岡、山﨑、小野寺が対応した）

十月七日　復旦大学歴史学系教授　朱藹貴　他1名（森、石川、袁、小野寺が対応した）

十月二四日　北京大学歴史学系教授　王暁秋（森、岩井、石川、袁、小野寺が対応した）

十一月十七日　フランス政治学財団　フランシス・ヴェリオー　他三名（金、大浦が対応した）

十二月十六日　北京民族大学副学長　閔文義、科研処処長　丁明俊、社会学研究所副所長　武宇林、副研究員　許生根（金、梶浦が対応した）

十二月三十日　駐日スウェーデン王国大使館　大使　ステファン・ノレーン夫妻（冨谷が対応した）

二〇〇九年二月六日　言語文学応用研究所副所長　靳　光瑾、北京師範大学　朱　瑞平（金、池田が対応した）

「中国社会主義文化」としての孫文崇拝

小野寺　史郎

二〇〇八年四月から現代中国研究センター助教に採用され、石川禎浩准教授の主催する「中国社会主義文化の研究」共同研究班に中途より参加させていただいている。「中国社会主義文化」というあまり耳慣れない概念について、二〇〇六年四月の同研究班開始時の石川班長による説明を紐解いてみると、「社会主義国家に普遍的に現れる独特の藝術・文化様式」「社会主義政党の生活モデルの党外社会への浸透」「政党指導下の文化」といった内容がここに含まれるという。

南京国民政府期を主たる研究対象とする私がこのような例として真っ先に連想するものは、一九二五年の孫文の死去以降、急速に展開されたその個人崇拝の展開という問題である。このテーマに関しては近年盛んに論じられており、石川班長自身も「総理紀念週」（毎週月曜日の午前中に行われた孫文を記念する集会）の成立という問題を通じて、近代中国における革命指導者の個人崇拝という文化現象に関して詳細な検討を行っている。

「総理紀念週」に代表される集会・儀式の他にも、南京国民政府は、学校や国家機関における孫文の「遺像」の掲示、会議時の「遺嘱」朗読の義務づけ、「三民主義」の経典化・体制教学化と学校教育への組み込みなどを政策的に実施した。これらさまざまな回路を通じて展開された孫文崇拝の様式は、遷台後の国府や人民共和国の政治文化にまで大きな影響を及ぼし続けて現在に至っている。

中国国民党・中国共産党がともに組織原理としてソ連共産党に範をとったものであるという経緯から、そして孫文の葬儀がレーニンのそれに倣ったものであったという具体的な例からも、このような政治文化が「社会主義」を標榜した、現実に存在した国家体制としてのソ連に影響を受けたものであったことは間違いない。

ただ注意すべきは、それらは「社会主義文化」であったのか、当時の社会主義体制とファシズム体制、そしてあるいは英米的な自由主義体制をも包括した近代国家に共通する文化様式であったのか。そのような文化様式を「中国社会主義文化」と位置づけ、さらにこの概念を用いて近代中国の歴史を解釈することで見えてくるものは何か、という問題である。

孫文の陵墓として南京に造営された「中山陵」は同地の明孝陵をモデルとしたものであり、その意味でそれは近代国民国家に普遍的に見られる「伝統の発明」の典型でもあった。また、同時期に蔣介石が展開した大衆運動である「新生活運動」にはキリスト教や日本の影響も指摘されている。

四年目に入る本研究班において、近代中国を理解する手掛かりとして「中国社会主義文化」という概念をさらに展開していくに際しては、これらの文化現象を構成するさまざまな要素の具体的な来源、伝播の経路、そして同時代における意図やその受け止められ方、以後の時代に及ぼした影響などについて慎重に腑分けを行う必要があるだろう。

共同と共有

藤井　正人

「調査から帰ったら戦利品を見せ合おう」――インド最南端のケーララ州で共同調査をしていた私たちが、しばしば言い合った言葉である。その地に存続しているヴェーダ学派の伝承と家系を、私を含めた三人の研究者で調査していたときのことである。聞き取りなどの調査は、三人が同じ場所で同時に行なうことはできない。ある者が前に出ているときは、他の者は後ろに下がらざるを得ない。共同での調査の現場では、各々が積極的に活動しながらも、けっして他の人の活動の妨げとなってはならないからである。またとない現場に居あわせて、あえて後ろにさがることは忍耐のいることである。はやる気持ちを押さえて譲りあうためには、それぞれが調査で得たもの、すなわち〈情報、資料、経験〉を可能な限り共有することについて、互いの了解が必要である。「戦利品を見せ合う」という言葉は、各人が得たものを、調査後、持ち寄って確認し、補い合うことによって共有化する作業を言ったものである。

共有化の作業は、共同調査にとっては極めて重要なことである。この作業を行なうことによって、共同で調査することの利点がはじめて確保されるといえる。

〈情報、資料、経験〉の共有化は、共同研究にとっても重要な作業の一つである。「王権と儀礼」をテーマとする私たちの共同研究では、会読と報告という二つの形の会合を交互に行なっている。会読では、毎回、異なる担当者が範囲を限って原資料の訳注を準備し、その訳注を参加者全員で点検し、問題箇所を議論している。共同調査における同様に、会読では毎回、準備のために一人の担当者が前面に出て原資料に取り組み、他の者は後方にさがっているが、担当者が得た〈情報、資料、経験〉は、会読の場で参加者全員の間で共有化される。毎回、これを繰り返すことによって、会読の参加者の間に、当該資料に関する共通の認識と理解が形成されていくのである。このように会読は、私たちの共同研究においては、参加者の共通の知的基盤作りとして機能している。つまり、会読を通して共有化された〈情報、資料、経験〉の上に、各班員がそれぞれの研究を展開し、それを報告するという仕組みである。知の共有化は、共同で研究することのメリットを担保する要となっている。

しかし、各自が得た〈情報、資料、経験〉をひとりの成果とせずに、他の人たちと共有することは、当人にとってはけっして心やすいことではない。自らの研究について、その成果を自分に帰属させることに関心のない研究者はいない。「共同」という研究形態において、参加者間の知の共有と、成果に対する各自のクレディット（手柄）をどのように調整するかが、コーディネーターとしての班長の腕の見せ所かもしれない。「共同」というものが、学問研究の上でどこまで可能で、どのような有用性があるのかを、問い続けることになるだろう。

『元典章』と案牘

岩井茂樹

台湾故宮博物院蔵の元刊本『元典章』は天下の孤本であり、かつては汲古閣毛晋が架蔵し、清代には内府の所蔵に帰していた。元をたどると、建康路（現在の南京がその中心）あたりの官吏が実務に使っていたものらしい。その某職員は、自分の本の末尾に、収賄の前歴をもつ戴必顕という胥吏の処分と任用をめぐる裁判沙汰の案牘を鈔写した。これが「都省通例」である。一通の文書でありながら、篇幅は三千文字を超える。

『元典章』にもまま長文の記事があるが、それは法例の条項を羅列したためである。関係する官庁間の文書の往復を経て、ある事案が決着する過程を示す案牘に由来する記事は、たかだか数百字の長さに要領よく縮められている。編纂と縮約の手が加えられた『元典章』の記事から、元朝時代の案牘の様式を知ることは困難であった。カラホト（黒水城）から発見された漢文文書には多くの元代案牘が含まれており、最近、その写真版が出版された。全編カラーであるのは喜ばしいが、破損が著しく、案牘として完備した姿を保つ文書は皆無である。ところが「都省通例」は、首尾一貫した一件の案牘を省略なしに鈔写したものである。その長大さと構成の複雑さは他に類を見ない。原文書そのものでないとう憾みはあるが、元代案牘の様式と文書往来による処理過程とを伝える貴重な鈔写文書である。

「元代の法制」共同研究班では、植松正氏の提案により、その解読に取り組んだ。文書の主人公戴必顕は、建康路で刑房の定員外胥吏であったとき、殺人犯の家

属から賄賂を受けた廉で刑罰を受け、職を失った。句容に移って県衙門に司吏（書記掛の胥吏）として潜りこんでいたが、そこで過去の汚点を暴かれて追訴され、免職・俸禄追徴の判決を受けるものの、未執行のまま溧水州の代書人として糊口をしのぎ、やがて建康路と江浙行省による判決の取消を勝ち得た。こうして溧水州の司吏に収まっていたところ、またもや告発された。戴必顕は反訴して争うのだが、最終的には大都の中書省・刑部が判断を下すことになる。こうした経緯を示す過去の文書を引証し、複数の官庁間での文書の往来をともないながら、一通の行政文書が組み立てられたのである。当時の行政裁判の過程を示す司法資料であるとともに、当時の官場の姿を伝える実に興味深いものであった。

比叡山で遭難しかけた話

水野直樹

「移民の近代史」共同研究班は、二〇世紀前半の東アジアにおける人の移動をテーマとして研究会を開いている。日本、朝鮮、中国が主な舞台になる。

京都でも一九二〇年代半ばに朝鮮人労働者と中国人労働者が同じ工事で働いていたことがある。その現場が八瀬であってみれば、見に行かないわけにいかない。そういう次第で、秋のハイキング日和に研究会のメンバーで八瀬まで出かけた。

一九二五年に完成した八瀬（叡山）ケーブルカーの工事で働いた労働者のことを書き残したのは、当時、同志社大学英文科に留学していた鄭芝溶（チョン・ジヨン）。同志社在学中から北原白秋主宰の雑誌『近代風景』に詩を投稿したり、帰国後に詩集を出したりして、朝鮮近代詩に大革新をもたらした有名な詩人である。ある日、女子学生とデートをして（朝鮮の故郷には妻がいたのだが）、鴨川・高野川沿いを歩いて八瀬まで行ったところ、ケーブルカーの工事現場に差し掛かった。朝鮮人労働者たちは二人を朝鮮人学生と知らず朝鮮語でからかった。鄭らは知らぬ振りをして通り過ぎようとしたが、労働者たちの妻らに朝鮮人であることを知られ、掘っ立て小屋に招き入れられ（無理やり連れ込まれ）食事までして帰った。

その思い出を書いた文章で鄭は、石工の仕事は中国人が受け持っている、と書いている。中国人が何人か働いていたことがわかるのだが、ケーブルカー工事でなぜ石工が必要なのか、鄭の文章を読んだだけでは理解できない。

八瀬ケーブル駅の左手の山道を登っていくと、ケーブルカーの線路を見ることができる。下の駅と上の駅の高低差が日本最大といわれるだけに、急な斜面に線路が敷かれている。線路をデコボコなしに敷くために、落ち込んだ斜面のところでは橋のような石積みを築いて線路を支えている。石積みが長いところは、まるで城壁のように見える。石工が必要だったのはこのためなのだ。石を切る技術に優れていた中国人労働者、その石を運び上げたり、山肌を掘り下げたりという仕事をした朝鮮人労働者。彼らが京都の「奥座敷」の開発を支える労働力だったことに、一同納得。

ケーブルカーの完成後、比叡山の上に行くためのロープウェイも敷設された。その工事にも朝鮮人労働者が従事したことが当時の新聞記事からわかる。現在のロープウェイは山頂に通じているが、戦前のそれは延暦寺方面に行くためにつくられた。ケーブルの上の駅から山道を一五分ほど歩いたところにロープウェイ乗り場があった。戦時中、金属供出のためロープウェイは廃止されたが、いまもその残骸があると聞いたので、昔の地図を頼りに道なき道（？）を歩き始めた。しかし、それらしいものは見つからない。夕暮れが迫り、遭難事件になってしまうかも、という思いが頭をよぎる。

それでも若い人の後をついて行くと、ロープウェイ乗り場らしきコンクリートが残っているところに行きついた。人が訪れることもないため、周りは雑草と木が生い茂っている。深い山の中での厳しい工事の様子を思い描いた後、別の道を少し歩いたら、何と、今では廃業してしまっている比叡山人工スキー場に出た。「遭難」などと心配したのは、まったくの杞憂に過ぎなかったのである。今度は車も通れる広い道をケーブルの駅まで戻ると、京都市街の夜景がきれいに見えた。

国際シンポジウム
変化する人種イメージ

竹沢泰子

昨年一二月五日・六日、百周年時計台記念館にて、「第一二回京都大学国際シンポジウム　変化する人種イメージ―表象から考える」を開催した。

シンポジウムの内容については、報告書や5月に上梓した論文集を参照して頂くとして、ここでは舞台裏の話をしよう。論文集の執筆者の間では、合宿も合評会も度重ねて行っていたので、打ち合わせはさほど必要ではなかったが、それ以外の報告者等との調整が一筋縄ではいかなかった。

その一。なかなか決まらないでいた理系のコメンテータに、学内の専門家からある方をご紹介頂いた。報告予定者の一人と一緒にその方に会って話をしたが、議論がなかなか噛み合わない。問題意識を共有して頂くためには、相当議論を重ねる必要があると感じた。他の報告予定者との打ち合わせは順調に進んでいたが、その方は遠方ということもあり、シンポまで再び会う時間がとれないという。結局関係者で話し合い、別の機会に是非とお願いした。私一人ではとても決断できなかったことである。シンポジウムを本気で成功させたいのであれば、人間関係よりも優先させるべきものがあるのであり、そのくらいの決断も時に必要だということをこのことから教えて頂いたように思う。

その二。リレートークに「友情出演する」と申し出て下さった学内のある先生にシンポ前にご報告頂いた時のことである。海外生活の長かった彼女は、海外の眼と自分の文化資源を融合させたユニークな作品を次々と発表し高い評価を得ている。誰もが英語で俳句を詠むことのできる新しいメディアツールもその一つである。しかし彼女が頻発させる「日本人」「日本文化」に、人文系の若手らは絶句。それを批判しなかった私にも非難の眼は向けられたらしい。しかし彼女に、「ホンシツシュギ」など外国語にしか響かないだろう。下手をすれば、あっさり「じゃ、別の機会に」とでも言われかねない。それに海外経験が長ければ、否応なしに「日本人」であることを意識させられる場面が日々あったというのも頷ける。作品というモノで勝負する彼女にすれば、細かな言葉や表現に反応する人文学の学問的方法論に疑問が沸いたことだろう。かといって、企画者としてはこのままでも困る。そこで彼女と二人で改めてゆっくり話したところ、彼女がとどのつまり伝えたいメッセージは、シンポのテーマの理想とすることだと確信した。あえて一言で言えば、一見日本的と思われるものが、コンピュータという機械を介すれば、文化背景に関係なく誰もが創れるユビキタスな文化へと「変化」（transform）するとでもいおうか。その後の経緯は省略するとして、結果的に彼女は自分の作品を彼女でしか言えない言葉で説明し、多くの人を感嘆させた。当初カルチャーショックを受けていた院生たちも、目を輝かせていた。

この規模のシンポジウムを企画・準備するのは、もう今回で体力的に限界だろうと思う。そのような「しんどい」ことはやるだけ損だという考え方もあろう。しかし今回改めて感じたのは、シンポジウムは、「共同研究の成果発表」や「社会貢献」というよりむしろ、人々が一堂に会することによって、独特の空気が醸し出され、それが新しい議論を生み出す場なのだ。特に専門家会議は、少なくとも私にとっては至極の時間だった。

固定した班員だけでは馴れ合いに陥ってしまう。様々な研究者との知的交流を通して、自分も研究班も一回り大きくして頂いた気がする。

ヴァイシャーリーにて

向井佑介

三月、初めてのインドで「最初の仏塔」をみた。仏陀の入滅後、その遺骨は八つの部族にわけられ、それぞれの地で仏塔が建立された。舎利を分配したバラモンは瓶をもらいうけ、また別の人びとは灰をかき集めて、それぞれ仏塔をつくって供養した。こうして、あわせて十か所に仏塔が起建されることとなった。その一つとされる仏塔が、ガンジス川の北、ヴァイシャーリーの地にある。

ヴァイシャーリーの仏塔は一九五〇年代に発掘され、なかから舎利容器が出土している。舎利容器は、土で築かれた直径八メートルほどの小さな塔の基部から発見され、その小塔の周囲を煉瓦で覆うかたちで四次の拡建がなされたことが判明した。調査者らは、遺構・遺物の状況と文献の記載をもとに、この土の小塔こそが、ヴァイシャーリーの人びとが仏舎利をおさめて建立した、「最初の仏塔」の一つだと考えたのである。

玄奘の『大唐西域記』は、アショーカ王が七塔から掘りだした舎利を細分して各地に八万四千塔を造立し

た際、ヴァイシャーリーの仏塔から舎利九斗をとって一斗をのこしたと伝えている。事実、滑石製の小さな舎利容器は、アショーカ王が塔をひらいた痕跡とおぼしき亀裂の奥に安置され、容器のなかには舎利を想起させる灰状の土が、巻貝・ガラス玉・金箔片・コインとあわせておさめられていた。

仏教史上かくも重要な仏塔のたたずまいは、なんとも言いようのない、もの悲しいものだった。見栄えのしない、小さな土の塚だったことが原因ではない。いまから思えば、それは遺跡そのものに対する印象というより、その保存のありように対する印象だったのだろう。発掘された仏塔は、完全には埋め戻さず、検出した遺構に覆い屋をかけて保存し、一般に公開されていた。発掘した遺構をそのまま保存、公開すること自体は決してめずらしくない。しかし気になるのは、それが仏教徒にとって神聖な、「最初の仏塔」の一つと考えられていることである。塔の内部を無惨にさらしたその姿は、インドにおいて仏教がもはやとおい過去の歴史となっていることを物語っていた。

ひるがえって人文研のなかに目をむけたとき、北白川の収蔵庫に数多くの仏像が箱積みされていることを思いだす。廃絶したガンダーラの寺院址で発掘されたこれらの仏像は、学術的には価値のたかいものである。しかし、敬虔な信者の目からみれば、学術目的の発掘も営利目的の略奪と同じ破壊行為であり、その間にはいかほどの差異もないのではないか。だからこそ、せめて学術資源としてはできるかぎり有効に活用せねばならないと思う。昨秋、総合博物館の企画展では、ひとまずその成果の一端を公開することができた。あの埃にまみれた重い木箱をもう一度ひっくりかえさねばならないと考えると、それだけで気が重いが、なんとか将来の研究に役立てていきたいものである。

分かつことのできない友人
——「テロ攻撃」にたいするオリシャのことば——

小池郁子

二〇〇九年、アメリカ合衆国で史上初の「黒人」大統領が誕生した。それにさかのぼること、約七年。あの「事件」が起きた日、アフリカ系アメリカ人の社会宗教運動を文化人類学的に調査するために、私はアメリカフロリダ州に長期滞在していた。いつもどおり、片田舎で代わり映えしない一日が始まろうとしていた。

友人のオミトワデが不意に訪ねてくるまで、「事件」のことは知る由もなかった。私が借り住まいしていた家にはテレビがなかったからである。というより、テレビは、アンテナの調子が悪く、白黒の波線しか映らない代物と化していた。友人は、そんな家に一人住んでいた私を案じて、ワゴン車を猛スピードで走らせて、迎えにきてくれたのである。

二〇〇一年九月一一日、午前、アメリカは一連の「事件」に遭遇した。この事件は、のちに「テロ攻撃」や「九・一一」として世間に定着させられていったことは周知のとおりである。

事件後、テレビ番組は一斉に報道番組へと切り替わり、多数の死傷者、混乱に陥る社会、さらに、その異様な光景によって精神的に打ちのめされた人々の姿を際限なく垂れ流していた。友人を筆頭に、彼女の家族や仲間たちは、そうした惨状を目にし、異口同音につぎの見解を述べた。

ハイジャックされた旅客機や、ワールド・トレード・センターの周辺に居合わせた、罪もない人々は一瞬にしてこの世から消え去った。ニューヨークの上空を彷徨う彼らの霊魂に同情し、哀悼の意を表したい。しかしその一方で、アメリカが有色人種世界にたいしておこなってきた行為、すなわち、ネイティヴ・アメリカンの虐殺、黒人の奴隷制度、キューバへの制裁、イスラムにたいする非難などを鑑みれば、アメリカが今回のような「攻撃」の対象となることは理解可能であるし、至極当然のことである。

その日の昼下がり、友人の母は、テレビ画面から放たれる社会の混乱をどのように解釈し、対処すればよいのかをメリンディンログン（Merindinlogun）に委ねることにした。友人の母は、司祭であり、西アフリカはヨルバを起源とする託宣の一つ、メリンディンログンを実践することができる。

「今日は二〇〇一年九月一一日、ここには私と夫、娘、私たちのシスター、イクコがいます。今朝の八時四五分をかわきりに、アメリカはテロの攻撃に遭いました。何千人もの人が亡くなったと言われています。この混沌の社会をどう理解すればよいのでしょうか、またどう対処すればよいのでしょうか、尋ねます」。

そうして、司祭の彼女は、「分かつことのできない

友人」という教えを授かった。

あるとき、仲の良い二人がいた。彼らは目の前を横切った「ある男」の特徴について話し始めた。一人は、「彼は織り目正しい、きれいな赤のスーツを着ていたよ」と言う。すると、もう一人は、「いいや、彼は黒のスーツを着ていたんだ。間違いないさ」と言い返す。彼らは、「僕がみたのは赤のスーツだ。自信があるよ」、「いや、絶対に黒のスーツだった。この目で確かめたんだから」、と繰り返すうちに諍いになった。

はたしてどちらが正しいのだろうか。実のところ、どちらも正しいのである。彼らが目にしたのは、オリシャとよばれるヨルバの神々の一柱、エシュ（伝言の神、境界・十字路を司る神）である。エシュは体の半分を赤で覆い、もう半分を黒で覆っているトリック・スターである。つまり、先の仲の良い二人は、エシュをそれぞれ異なる方向からみていたのである。だから喧嘩になったのだ。けれども、どちらも間違ってはいない、そう、どちらも正しいのだから。

なるほど、二〇〇一年九月一一日の「事件」を境に生じた社会混乱を解釈し、それに対処する鍵は、事件を起こしたとされる側も、その被害に遭ったとされる側も根本的には同じである、というところにある。だからこそ、上辺では衝突してしまうが、友好まで失うべきではないのである。

あの事件から約七年の年月が経った。世界は、遅ればせながらも、「あの男」はエシュだったと気づき始めている。アメリカの希望を一身に背負うオバマ大統領は、在任中に、イラクだけではなく、アフガニスタン、さらには世界の各地を飛び跳ねるエシュと「対面」することができるだろうか。

リロコボイ

浅原達郎

ふと思い立って、六年前から、「中国古代の暦」という講義を、全学共通科目として開講しているのだが、毎年、歳差の説明のところで苦労する。身の程知らずはわかっているが、避けて通ることもできないのである。そこで今年は、こんなたとえ話をしてみた。

グラウンドのトラックを走っているランナーがいたとしよう。ランナー（地球）が元の地点に戻って来たら、一周（恒星年）である。もしトラック全体が傾いていたとしよう。ランナーにとってはアップダウンが生じる。このアップダウンのくり返しもやはり一周（回帰年）である。そこで、もしトラックが逆方向にゆっくり回転していたとしよう。すると、どこかアップダウンの基準となる地点（春分）から、一周して再び基準点に戻ったとしても、アップダウンの回転とともに基準点が動いているので、元の地点に戻るためには、まだ少しだけ走らないといけない。その差が、歳差である。

グラウンドの回りにフェンスがあって、広告（黄道付近の星座）が書かれていたとしよう。さらにグラウンドの中央にライト（太陽）が灯っていたとしよう。ランナーから、ライトの向こうに隠される広告の文字を見れば、どこを走っているかがわかる。フェンスの広告というと、思いつくのは「イボコロリ」である。ランナーが走るにつれて、ライトは「リロコボイ」の順に文字を隠していくだろう。さて、アップダウンの基準点に来たとき、ちょうどライトが「リロコボイ」の「イ」の文字を隠したとしよう。「イ」が春分点である。ところが、何周もしているうちに、基準点に来たときのライトの位置が「リロコボイ」の「ボ」に移っている。歳差による春分点の移動である。

こんなたとえ話によって歳差を理解した受講者がどれほどいたのかは怪しい。しかし、かれらのレポートを読むと、歳差といえば「イボコロリ」を連想する学生を、数人作り出してしまったようである。また、なぜ「イボコロリ」なのかは大きな謎だったようで、その場で電子辞書を使って調べたがわからなかったという学生もいた。むかし、いしいひさいち氏の野球まんがでは、外野のフェンスの広告は「イボコロリ」と決まっていた。いしい氏ならびに製造販売元の製薬会社に対して、無断借用をおわびしたい。

空しく電子辞書を引いた学生は、あとで薬の名であることを知り、「機会があれば使ってみたい」とレポートに記していた。来年の講義でもこのたとえ話をするとしたら、使用上の注意をよく読みなさいと、断わりを入れないといけないのであろうか。

書いたもの一覧　二〇〇八年四月～二〇〇九年三月（氏名五十音順　◉は単行本）

李　昇燁

日本帝国の植民地・勢力圏における在留禁止の制度と運用　「日本帝国殖民地之比較研究」国際学術研討会論文集　中央研究院台湾史研究所　十月

外務省における「外地人」官僚――朝鮮人副領事特別任用制度を中心に――　松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』　思文閣出版　三月

池田　巧

広東語　石井米雄編『世界のことば　辞書の辞典』アジア編（共著）　三省堂　八月

石川禎浩

一九四九年を跨ぐ中国共産党史上の歴史認識問題――いわゆる「西北歴史論争問題」を事例として　近きに在りて　五三号　五月

現代中国研究センターができるまで　人文　五五号　六月

山口一郎記念賞を受賞して（附神戸大学所蔵の孫文の革命パンフレット）　孫文研究　四四号　九月

◉孫中山致蘇聯政府的遺書　当代中国探索叢刊第一輯　人間文化研究機構・当代中国地区研究核心基地早稲田大学現代中国研究所　十一月

In Search of a New Vision: Recent Japanese-Language Overviews of Modern Chinese History. *Journal of Modern Chinese History* 2(2)　十二月

書評　韓鋼著・辻康吾編訳『中国共産党史の論争点』　中国研究月報　七三一号　一月

伊藤順二

書評　山口巌『パロールの復権』（ゆまに書房一九九九）　類型学研究　二号　六月

稲葉穣

行歴僧伝研究とアフガニスタン新発現資料　『シルクロード発掘70年』　臨川書店　十月

バーミヤーン遺跡の現状　『シルクロード発掘70年』　臨川書店　十月

東西超大国が衝突したタラス河畔の戦い　新・歴史群像シリーズ一八『大唐帝国』　学研　三月

井波陵一

漢から魏へ――上尊号碑　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『三国鼎立から統一へ　文書と碑文をあわせ読む』　研文出版　十月

岩井茂樹

Developments in Trade and Trade Theory in the Ming and Ch'ing. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies.* LII　一月

明代中國的禮制霸權主義與東亞的國際秩序（伍躍訳）　日本中国史研究年刊二〇〇六年度　五月

岩城卓二

譜代大名岡部氏と岸和田　大澤研一・仁木宏編『岸和田古城から城下町へ』　八月

掛屋になること――幕末社会の情報蒐集――　倉敷の歴史　一九号　三月

◉◉

◉

ウィッテルン・クリスティアン

Review of Steven Heine, Opening a mountain: Kōans of the Zen Masters. Japanese Religions. 33 (1 & 2).　七月

◉Das Grosse Lexikon des Buddhismus. Zeittafeln und Karten Indien・China・Japan・Westliche Rezeption Texte von Tobias Bauer, Annette Heitmann, Gregor Paul und Christian Wittern. Herausgegeben von Gregor Paul. Eine Veröffentlichung des EKŌ-Hauses der Japanischen Kultur in Düsseldorf, Iudicium Verlag München, 2008.（共編）　八月

Text and Tradition in Chinese Buddhism. Tsuneki Nishiwaki (ed.) Research on the Chinese Materials in the Berlin Turfan Collection: Continued.　十二月

大浦康介

◉翻訳　ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』　筑摩書房　十一月

未読書コメント術　ちくま　No. 453　筑摩書房　十二月

小説ながら、さりながら（フィリップ・フォレスト『さりながら』白水社、二〇〇八の書評）　図書新聞　二九〇四号　二月七日

岡田暁生

◉CD51で語る西洋音楽史　新書館　八月

◉ピアニストになりたい　一九世紀もう一つの音楽史　春秋社　十月

岡村秀典

◉中国文明　農業と礼制の考古学　京都大学学術出版会　五月

中国鏡の年代　『新弥生時代のはじまり三　東アジア青銅器の系譜』　雄山閣　五月

宋明代の古鏡研究――青柳種信の参考にした漢籍　九州と東アジアの考古学　五月

◉シルクロード発掘70年―雲岡石窟からガンダーラまで（共編著）　臨川書店　十月

漢鏡2期における華西鏡群の成立と展開　東方学報　八三　九月

墳墓から王権の成立を読み解く
「婦負のクニ」成立のころ　富山市教育委員会　十月
中国における初現期の都市
　古代東アジアにおける都市の成立　奈良女子大学二一世紀COEプログラム報告集二二　十一月
中国古代の青銅器生産　國學院雑誌　一〇九―一一　十一月
魏の民間歌謡と鏡銘　東アジアの古代文化　一三七　一月
型式学と年代
　考古学――その方法と現状　放送大学教育振興会　三月
東アジア古代の青銅器分布　同右
中国考古学と社会主義の考古学　同右
古墳時代の国際環境　『鳥取県の考古学五　古墳時代』　鳥取県埋蔵文化財センター　三月

小野寺　史郎

翻訳　聞黎明　近年の中国現代政治思想史研究管見　近きに在りて　五四号　十一月
翻訳　セバスティアン・ビリユ&ジョエル・トラヴァール「教化」教育プロジェクトとしての儒教復興　中島隆博編『中国伝統文化が現代中国で果たす役割』　東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育センター」　十二月
平衡国民性与民族性：清季民初国歌的制定及其争議　中山大学学報（社会科学版）　四九巻一期　一月

籠谷　直人

東アジアにおける自由貿易の浸透（共著）　遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの最前線』（日本学術振興会JSPS人文社会科学振興プ研究事業成果報告書）　東信堂　三月
中日全面戦争後的在日華僑、印僑網絡　華僑華人歴史研究　二〇〇八年第2期　六月
華僑華人研究から学んだこと　神戸華僑華人研究会創立20周年記念誌（一九八七―二〇〇七）　三月
東アジアにおける自由貿易原則の浸透　二〇〇八東アジア韓国学国際学術会議および東アジア韓国学会　十二月

加藤　和人

iPS細胞研究――正確な情報共有と対話を　京都新聞　四月
ゲノム医療の発展に向けた研究体制と市民との対話に関する考察――全ゲノム関連解析とデータ共有を例にして（高橋貴哲と共著）　医学のあゆみ　五月
Analysis of Japanese Newspaper Articles on Genetic Modification（標葉隆馬他二名と共著）　*Journal of Science Communication*　六月
Multimedia presentations on the human genome: Implementation and assessment of a teaching program for the introduction to genome science using a poster and animations（加納圭他七名と共著）　*Biochemistry and Molecular Biology Education*　十一月
Mouse model: what do Japanese life sciences researchers mean by this term?（東島仁他二名と共著）　*Journal of Science Communication*　二月
日本のマス・メディアと生命科学情報――生命科学研究者の意見から（東島仁他二名と共著）　科学技術コミュニケーション　三月
ゲノム科学への導入のためのポスター『一家に一枚ヒトゲノムマップ』（加納圭他三名と共著）　科学技術コミュニケーション　三月

菊地　暁

助手班考　人文　五五号　六月
「おまえはすでに〈民俗学者〉だ」――〈民俗学〉の「可能性」なるものの語り方――　国文学解釈と鑑賞　七三巻八号　八月
京大国史の「民俗学」時代――西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力――　丸山宏・伊從勉・高木博志編『近代京都研究』　思文閣出版　八月
洋食・日本・モダニズム――明治屋PR誌『嗜好』に見る――　VESTA　七二号　十一月
書評：山路勝彦著『近代日本の植民地博覧会』　日本歴史　七二七号　十二月
「野の学問」　柳田民俗学と文化史学　京都新聞　一月二三日朝刊
事典項目　民俗学の最先端　日本文化人類学会（編）『文化人類学事典』　丸善　一月
「歴史民俗学」存疑　『宗教研究』　三五九号　三月
敵の敵は味方か？――京大史学科と柳田民俗学――　一編『民俗学的想像力』　せりか書房　三月
ところでぼくらはなにをすればよいかの民俗学的景観論　岩本通弥編『地域資源としての〈景観〉の保全および活用に関する民俗学的研究』　科研費成果報告書　三月

金　文京

三国志の史実と虚構　大三国志展（東京富士美術館）解説　五月
韓国発見元刊本《至正条格》残巻簡介　域外漢籍研究集刊　第四輯　中華書局　五月
福沢諭吉の漢詩（一）序説――福沢諭吉の漢詩について　福澤手帖　一三七号　六月
『三国志平話』の結末についての試論　狩野直禎先生傘寿記念三国志論集　汲古書院　九月
福沢諭吉の漢詩（二）仏像を買う――福澤の仏教観と文化財保護　福澤手帖　一三八号　九月
天竜寺妙智院蔵「勧世文酒茶四問」について　アジア遊学　一一四号　勉誠社　九月
福沢諭吉の漢詩（三）政治より経済――小泉信吉・中上川彦次郎を送る詩　福澤手帖　一三九号　十二月
元刊雑劇の研究（五）李太白貶夜郎全訳校注前篇（共著）　京都府立大学学術報告（人文社会）　六〇号　十二月
映画レッドクリフと三国志　京都民報　十二月一四日

敦煌舜子変與廣西壮族師公戯舜児
西域―中外文明交流的中轉站　香港城市大学出版社　二月
軍事物語和中国文学　日語学習与研究　二月号　二月
高麗本「孝行録」과中国의二十四孝　韓国文化　四五号　ソウル大学校奎章閣韓国学研究院　三月
『杜家立成雑書要略』と唐代文学　中国文史論叢　五号　三月
福沢諭吉の漢詩（四）進歩と変化への懐疑　福澤手帖　一四〇号　三月

久保昭博

Du «cadre narratif» dans *Exercices de style* de Raymond Queneau. *ZINBUN*, 40　二〇〇八年三月
書評　日常のなかの異空間　レーモン・クノー著、塩塚秀一郎訳『あなたまかせのお話』　図書新聞　二月十四日号

黒岩康博

関野貞日記（共同翻刻・執筆）　中央公論美術出版　二月
奈良万葉植物園の創設過程　ランドスケープ研究　七一巻五号　五月
旅の醍醐味――白い布と黒いカビ――　鴨東通信　七〇号　六月
田中緑紅の土俗学――『奇習と土俗』と二つの旅行――　丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』　思文閣出版　八月

小池郁子

コミューンから聖地へ――アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動における拠点の変容　人文学報　九七号　八月
事典項目　信仰の伝播　日本文化人類学会（編）『文化人類学事典』　丸善　一月

古勝隆一

魏晋時代の皇帝権力と死刑――西晋末における誅殺を例として　冨谷至編『東アジアの死刑』　京都大学出版会、二〇〇八年二月
◉余嘉錫『古書通例』（共訳）　平凡社　東洋文庫　六月

小関隆

◉近代都市とアソシエイション　山川出版社　十二月

曽布川寛

有鄰館の中国文人書画――黄庭堅・王庭筠・呉偉業――『會津八一がみたラストエンペラーの至宝』　會津八一記念館　七月
龍門石窟北朝造像若干問題的探討（二）　中国佛教芸術　第二輯　南京大学出版社　九月
雲岡石窟再考　東方学報　八三冊　九月
◉聖地チベット　ポタラ宮と天空の至宝（共編著）　大広　三月

高井たかね

「愛日軒陸貞一」のこと　漢字と情報　一七号　十月

高木博志

「神武聖蹟の顕彰」ほか　『ハンドブック、生駒の歴史と文化』　生駒市教育委員会　三月
◉近代京都研究（丸山宏・伊従勉と共編著）　思文閣出版　八月
『史蹟名勝天然紀念物』昭和編・解題　一九二六（大正一五）年一月～一九四四（昭和一九）年八月『史蹟名勝天然紀念物』（昭和編）解題・総目次・索引　不二出版　十一月
近代日本と豊臣秀吉　鄭杜熙他編『壬辰戦争――一六世紀日・朝・中の国際戦争』　明石書店　十二月
近代の皇室と仏教信仰――晃親王の仏教帰依　『宗教と現代がわかる本』　平凡社　三月

高階絵里加

草間彌生《南瓜》　漢字と情報　17号　十月

高田時雄

現存最古の大唐西域記寫本　いとくら　三号　一月
李滂と白堅・補遺　敦煌寫本研究年報　二號　三月
漢字文化繼承についての氣懸かり　漢字と文化　十二号　三月
京都興聖寺現存最早的《大唐西域記》抄本　敦煌研究　二〇〇八年第二期　四月
大唐三藏玄奘法師表啓に關する一問題――玄奘と長命婆羅門　佛教文献と文學――　日臺共同ワークショップの記録2007　九月
敦煌遺書の出自　『シルクロード発掘70年』　臨川書店　十月
内藤湖南の敦煌學　東アジア文化交渉研究　別冊三　十二月
Japanese Researchers of Russian Collections (in Russian and English), Russian Expeditions to Central Asia at the Turn of the 20th Century. Slavia, St. Petersburg.　十二月

竹沢泰子

書評　米山裕・河原典史編著『日系人の経験と国際移動――在外日本人・移民の近現代史』　移民研究年報　一四号　四月
◉兵庫県における多文化共生施策――評価と政策提言　財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構　研究年報　第一三巻　四月
'Tabunka Kyōsei' and Community-Rebuilding After the Kobe Earthquake.' Ertl, John and Kenji Tierney (eds.) *Multiculturalism in the New Japan: Crossing the Boundaries Within Japan*. Berghahn Books　四月
第12回京都大学国際シンポジウム　変化する人種イメージ――表象から考える　ヒューマンライツ　部落解放・人権研究所　十月

Toward a New Kind of Collectivity in American Studies, *Nanzan Review of American Studies,* 30　十一月
変革のうねり　米大統領選を聞く　京都新聞　十一月
オバマ次期大統領　人種の分断から「一つのアメリカ」へ
『朝日新聞』　十二月
Can Obama unite racially divided America? *Herald Tribune-Asahi Shimbun*　十二月
事典項目　移民国家アメリカ　文化人類学会（編）『文化人類学事典』　丸善　一月
事典項目　現代人の起源　文化人類学会（編）『文化人類学事典』　丸善　一月
事典項目　人種とエスニシティ　文化人類学会（編）『文化人類学事典』　丸善　一月
◉第12回京都大学国際シンポジウム報告書『変化する人種イメージ――表象から考える』（編）　京都大学　三月

武田時昌

The Formation of the Study of Shushu 術數 and its Development in the Middle Ages: A Tentative Study of a Field of Scientific Study Peculiar to East Asia. *HISTORIA SCIENTIARUM.* 17(3)　二〇〇八年三月
中国学のヒント12　中国伝統科学　東方　三三七　三月

田中淡

黄泉の暮らしと住まい――明器陶屋の世界　『中国古代の建築とくらし――茂木計一郎コレクション』（創立三〇周年記念企画展図録）　愛知県立陶磁資料館　六月
日本建築に探る中国文化の古層　歴博国際シンポジウム二〇〇七　日中比較建築文化史の構築――宮殿・寺廟・住宅――　報告書　国立歴史民俗博物館　三月

田中雅一

Marrying Within: A Case from a Tamil Fishing Village in Sri Lanka, *International Journal of South Asian Studies* 1　四月
書評　Mark McLELLAND and Romit DASGUPTA (eds.) Genders, Transgenders and Sexualities in Japan. *Social Science Japan Journal,* 11(1)　六月
所のうち・そと　今村仁司と共同研究の作法　人文　五五号　六月
共著 The Indian Community in Kobe: Diasporic Identity and Network, In K. Kesavapany, A. Mani and P. Ramasamy (eds.), *Rising India and Communities in East Asia*　八月
軍隊を人類学する――ナショナルとトランスナショナル　春日直樹編『人類学で世界をみる――医療・生活・政治・経済』　ミネルヴァ書房　八月
書評　河合香吏編『生きる場の人類学――土地と自然の認識・実践・表象過程』　文化人類学　七十三巻二号　九月

書評：川島耕司『スリランカと民族――シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団』　南アジア研究　二〇号　十二月
事典項目　供犠、性的誘惑　着衣と脱衣　日本文化人類学会（編）『文化人類学事典』　丸善　一月
宗教学は誘惑する　宗教研究　八十二巻四号通巻三百五十九号　一月
ディスカッションの要約　宗教研究　八十二巻四号通巻三百五十九号　一月
◉フェティシズム研究1　フェティシズム論の系譜と展望（編著）　京都大学学術出版会　二月
序章　フェティシズム論の課題と展望　田中雅一編『フェティシズム研究1　フェティシズム論の系譜と展望』　京都大学学術出版会　二月

立木康介

フロイトとサド　思想　二〇〇八年　第四号　四月
制度を使った精神療法とラカン派応用精神分析　多賀茂・三脇康生編『医療環境を変える』　京都大学学術出版会　八月
アンケート　精神分析の原罪　『哲学の歴史』別巻　中央公論新社　九月
想像界・象徴界・現実界　井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックスI　自己・他者・関係』　世界思想社　九月
結び目と振り子（上）　思想　二〇〇九年　第一号　一月
結び目と振り子（下）　思想　二〇〇九年　第二号　二月
翻訳　ジークムント・フロイト「器質性運動麻痺とヒステ

リー性運動麻痺の比較研究のための二、三の考察」『フロイト全集1』　岩波書店　二月
翻訳　ジークムント・フロイト「強迫と恐怖症、その心的機制と病因」『フロイト全集1』　岩波書店　二月

富永茂樹

事業紹介・明倫茶会『藝文京』第一〇七号　京都市芸術文化協会　十月
◉転回点を求めて――一九六〇年代の研究（編著）　世界思想社　三月

富谷至

◉国際シンポジウム　東アジアにおける儀礼と刑罰　研究成果報告書　五月
総説　石刻資料と三国時代　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『三国鼎立から統一へ　史書と碑文をあわせ読む』　十月
秦漢律令の未熟性　林信夫・新田一郎『法が生まれるとき』　創文社　十月
従簡牘到紙――以《論語》顔淵篇的錯簡為中心　『簡帛』第三輯　十月
◉Ritual, Justice and Art in East Asia — Symposium organized by Leiden University and Kyoto University in Leiden, 1-3 September, 2008　三月

永田知之

『文場秀句』小考――「蒙書」と類書と作詩文指南書の間　敦煌写本研究年報　二号　三月
今人も古に及ぶ――皎然の文学史観――　中唐文学会報　一五号　十月

船山徹

異香ということ――聖者の体が発する香り　アジア遊学二〇　特集アジアの心と身体　勉誠出版　六月
◉涅槃経の来た道――曇無讖伝　宗教情報センター　十月

藤井律之

魏から晋へ――王基碑――　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『三国鼎立から統一へ　史書と碑文をあわせ読む』　研文出版　十月

藤井正人

ヴェーダ文献学と現地調査『シルクロード発掘70年』　臨川書店　十月
ヴェーダ期インドにおける王権と司祭権（第五八回東方学会全国会員総会講演・研究発表要旨）　東方学　第百十七号　一月

藤原辰史

待機する共同体――ナチス収穫感謝祭の参加者たち　一九三三―一九三七『人文学報』九六号　四月
◉食の共同体――動員から連帯へ（共著）　ナカニシヤ書店　五月
システムキッチン　京都大学新聞　六月
◉翻訳　エルンスト・ブロッホ『ナチズム――地獄と神々の黄昏』（共訳）　水声社　十二月
麦おばさんはどこへ行ったのか――村の収穫祭とナチズムゲシヒテ　二号　三月

宮紀子

叡山文庫所蔵の『事林広記』写本について　史林　九一巻三号　五月
対馬宗家旧蔵の元刊本『事林広記』について　東洋史研究　六七巻一号　六月

宮宅潔

魏・蜀・呉の正統論　京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編『三国鼎立から統一へ　史書と碑文をあわせ読む』　研文出版　十月
書評　水間大輔著『秦漢刑法研究』　日本秦漢史学会会報　九号　十二月

水野直樹

朝鮮総督はなぜ創氏改名を実施したか　明日を開く歴史財団編『質問する韓国史』坡州、西海文集（朝鮮文）　四月
◉創氏改名――日本の朝鮮支配と名前の政治学――（鄭善太訳）　ソウル、図書出版サンチョロム（朝鮮文）　八月
植民地支配政策比較研究のために――朝鮮の「創氏改名」と台湾の「改姓名」――『日本帝国殖民地之比較研究』国際学術研討会論文集』台北　中央研究院台湾史研究所　十月
◉京都と韓国の交流の歴史（2）（共同執筆）　韓国民団京都府本部発行　十二月
京都の中の近代日朝関係史――長楽館と韓国合併奉告祭碑――『（二〇〇七年度講演録）講座・人権ゆかりの地をたずねて』　（財）世界人権問題研究センター　一月
思想検事たちの「戦中」と「戦後」――植民地支配と思想検事――　松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』　思文閣出版　三月

向井佑介

◉シルクロード発掘70年――雲岡石窟からガンダーラまで（共編著）　臨川書店　十月
シルクロード発掘70年――雲岡石窟からガンダーラまで　漢字と情報　一七号　十月
◉京都大学所蔵古瓦図録Ⅲ（天沼俊一コレクション　中国・朝鮮篇）（編著）　京都大学大学院文学研究科考古学研究室　三月

森　時彦
中関村雑感　現代中国地域研究拠点連携プログラムニューズレター　二号　九月

守岡知彦
MeCabを用いた古典中国語の形態素解析の試み
情処研報　2008　No.73　2008-CH-79　七月
データを生み出すデータのために
人文科学とコンピュータシンポジウム論文集　情報処理学会シンポジウムシリーズ　2008　No.15　十二月
類目外字における“Old Hanzi”
東洋学へのコンピュータ利用　第20回研究セミナー　三月

矢木　毅
◉高麗官僚制度研究　京都大学学術出版会　十一月
近世朝鮮時代の古朝鮮認識　東洋史研究　六七巻三号　十二月

安岡孝一
人名用漢字の新字旧字「鬪」と「鬭」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　四月三日
人名用漢字の新字旧字「靖」と「靖」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　四月一七日
人名用漢字の新字旧字「蛍」と「螢」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　五月八日
常用漢字表の拡大はJIS漢字にどういう混乱をもたらすか
日本語学会2008年度春季大会予稿集　五月
人名用漢字の新字旧字「叙」と「敍」と「敘」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　五月二二日
人名用漢字の新字旧字「隆」と「隆」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　六月五日
人名用漢字の新字旧字「栄」と「榮」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　六月一九日
人名用漢字の新字旧字「堯」と「堯」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　七月三日
人名用漢字の新字旧字「勁」と「勁」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　七月一七日
人名用漢字の新字旧字「凛」と「凜」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　七月三一日
人名用漢字の新字旧字「卒」と「卒」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　八月一四日
人名用漢字の新字旧字「礼」と「禮」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　八月二八日
人名用漢字の新字旧字「縄」と「繩」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　九月一一日
人名用漢字の新字旧字「学」と「學」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　九月二五日
「漢字情報學の構築」共同研究班報告
東方學報　八三冊　九月
漢字文化と日本語の未来　日本語の研究　四巻四号　十月

人名用漢字の新字旧字「唖」と「啞」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　十月九日
人名用漢字の新字旧字「祇」と「祇」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　十月二三日
人名用漢字の新字旧字「曽」と「曾」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　十一月六日
人名用漢字の新字旧字「痩」と「痩」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　十一月二〇日
人名用漢字の新字旧字「弥」と「彌」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　十二月四日
人名用漢字の新字旧字「姫」と「姬」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　十二月一八日
人名用漢字の新字旧字「鴎」と「鷗」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　一月一五日
人名用漢字の新字旧字「飲」と「飮」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　一月二九日
人名用漢字の新字旧字「真」と「眞」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　二月一二日
人名用漢字の新字旧字「餅」と「餠」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　二月二六日
人名用漢字の新字旧字「万」と「萬」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　三月一二日
人名用漢字の新字旧字「遡」と「遡」
三省堂ワードワイズ・ウェブ　三月二六日
新常用漢字（仮称）試案の字体における問題点　東洋学へのコンピュータ利用　第20回研究セミナー　三月二七日

山崎　岳
陳春声報告へのコメント——地域社会の「内在的文脈」について　大阪市立大学大学東洋史論叢　別冊特集号　一月
二〇〇七年の歴史学会　回顧と展望　明清
史学雑誌　一一七編　五号　五月

山室信一
国際シンポジウム「今、何が起きているのか——基調講演」
朝日新聞　四月二八日
知的巨人の足跡を追って　遼　二七号　四月
China is once more a challenge for the world Herald International Tribune　五月六日
平和的生存権　現代のことば　京都新聞夕刊　五月三〇日
◉明六雑誌・中（中野目徹氏と共編・校注）　岩波文庫　六月
司馬さんからのたより　ラジオ深夜便　九六号　六月
舞楽而留　現代のことば　京都新聞夕刊　七月三一日
政治と「平和の祭典」　熊本日日新聞　八月一〇日
対談　満州国と戦後日本の光と影（佐野眞一氏と）　中央公論　九月号　八月
インタビュー・世襲政治を問う　京都新聞　十月六日
外交指針　現代のことば　京都新聞夕刊　十月七日
東アジアにおける共同体と空間の位相　環　三五号　十月
始点としての第一次世界大戦、真実の権利回復要求　『歴史

は生きている』　朝日新聞出版　十一月
私は貝になりたい　現代のことば　京都新聞夕刊　十二月一二日
国民帝国・日本の展開と学知の位相　九州史学　一五二号　一月
有関台湾和日本的海洋性之空間心性與政策的地勢意義　台湾大学人文社会高等研究院院訊　三巻四期　一月
指針なき時代における研究の模索　『次世代ワークショップ論文集』第2集　立命館大学コリア研究センター　一月
智の都　東京人　二六五号　二月
ヒバクシャ　現代のことば　京都新聞夕刊　二月一二日
「近代」の奔流と逆流――六〇年代日本精神誌の一側面　富永茂樹編『転回点を求めて・一九六〇年代の研究』　世界思想社　三月

横山俊夫

Civility in a Polytheistic Environment: a Perspective from the Japanese Experience, Abstract from the 21st European Conference: 'Asia encounters the Occident — Dialogue of the Future, Prague 6-9 March 2008, European Office Hebrew University of Jerusalem, Paris : www.european-conference. info; also in the Kyoto University OPIR website: www. opir. kyoto-u. ac. jp　四月

Civilising the Usage of the Word "Civilisation", Abstract from the aforementioned European Conference, Prague, March 2008, European Office H. U. J., Paris; also in the Kyoto University OPIR website　四月

今ふたたび、情報を考える（第25回'07比叡会議報告書、共同企画、趣意書執筆、共編）　比叡会議事務局　日本アイ・ビー・エム株式会社　四月

イギリス体験と日本――文化交流の個人史から（聞き手、横山俊夫／1997.7.24収録のものを再録）『萩原延壽集』7　朝日新聞出版　五月

Innovation of Knowledge and Education for the Global Sustainability: Kyoto University's Case, speech with slides by Kazuo Oike, assisted by Toshio Yokoyama and Aislie Kerr, G8 University Summit, Sapporo, 30 June　六月

京都大学の事例紹介（分科会「国際的な大学間連携及びコンソーシアムの活用」における講演、討論、スライド）『大学の国際戦略――課題と展望――』（大学国際戦略本部強化事業　平成19年度公開シンポジウム報告書）　六月

東アジア研究型大学協会（AEARU）第22回理事会の開催／国際交流多目的ホール竣工記念披露式を挙行（共編）『京大広報』No. 636　七月

APRU（環太平洋大学協会）第12回年次学長会議について／APRU World Institute理事会報告（7.14役員懇談会報告資料）　第311回国際交流委員会資料　七月

Opening Remarks for the Workshop, at APRU World Institute CMAS 3rd Planning Meeting, Danang: 'Integrated Water Resources Management and Impacts of Climate Change,' in the Kyoto University OPIR website　九月

The 11th Kyoto University International Symposium 2008 (KUIS-11) : Frontier Bioscience in Modern Medicine, Shanghai, P. R. China, Oct. 9-11, 2008 — Abstracts —（湊長博氏、畑中恵美子氏、Ainslie Kerr氏と共編）　九月

Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), *Report of the 8th Evaluation Committee for Research Projects,*（第8回研究プロジェクト評価委員会共同作成）　総合地球環境学研究所　九月

Messaage from the President, by Hiroshi Matsumoto, editorial assistance by Toshio Yokoyama and Ainslie Kerr, Kyoto University 2008/2009 Profile, International Affairs Division, Kyoto University　十月

Kyoto University, in 'World beaters: but what makes these universities special?' *Times Higher Education*, 9 October 2008　十月

Addendum, in Bo Guang Zhao, Kazuyoshi Futai, Jack R. Sutherland, and Yuko Takeuchi, *Pine Wilt Disease* (Springer: Tokyo, Berlin, Heidelberg, and New York, 2008)　十月

尾池総長がAEARU総会・理事会を主宰――中国科学技術大学50周年創立祝典出席、上海交通大学表敬訪問――（共編）『京大広報』No. 638　十月

第11回京都大学国際シンポジウムを開催（共編）『京大広報』No. 639　十一月

第12回京都大学国際シンポジウム　アブストラクト集「変化する人種イメージ――表象から考える」（シンポジウム趣旨共同作成、編集支援）　KUIS-12編集委員会編、京都大学国際交流機構　十二月

京都市国際化推進プラン（策定委員会座長として共同討論、共同編集）　京都市総務局国際化推進室　十二月

第12回京都大学国際シンポジウムを開催（共編）『京大広報』No. 641　一月

G8 University Summit Sapporo Sustainability Declaration (SSD), (jointly-composed) in *Report of the G8 University Summit, June 29 - July 1* (c/o Hokkaido University: Sapporo, 2008)　一月

Our Long Way to Go: a welcome speech on the morning of the second day　竹沢泰子編、第12回京都大学国際シンポジウム報告書「変化する人種イメージ――表象から考える」　京都大学国際交流推進機構　三月

APRU第6回シニアスタッフミーティング出席報告書（竹安邦夫氏と共編、3月25日付、第318回国際交流委員会　席上配付資料）　三月

What is the University Administrators Workshop? — opening a cooperative stage for university international offices on the west side of the Pacific Rim, read at the

ALOUD FORUM, APRU 6th SSM, Melbourne, 20 March.（第45回国際交流推進機構運営委員会資料） 三月

「地球温暖化」京都タウンミーティング――「京都」から国連事務総長へのメッセージ 報告書（企画準備・編集支援） 三月

Opening Remarks, *The 4th University Administrators Workshop — Building International Partnership: In quest of a more creative exchange of students, 12-13 February, 2009* 三月

Raising Afresh the Eternal Question: a few remarks at the end of KUIS-11, *The 11th Kyoto University International Symposium (KUIS-11): Frontier Bioscience in Modern Medicine — Report, Shanghai, China, Oct. 9-11, 2008*（湊長博氏，塚本政雄氏，Ainslie Kerr氏，韓立友氏，畑中恵美子氏と共編） 三月

Pacific Rim Cities: Climate Change Mitigation and Adaptation Strategies, by Rajib Shaw, Toshio Yokoyama and AWI/CMAS Kyoto University Team, in Shigeo Fujii, ed., *Proceedings of 2nd GSGES Global COE Workshop, January 18, 2009*. Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University 三月

◉『嶋臺塾記録』第四冊（企画・編集・編集後記）
京都大学大学院地球環境学堂 三才学林 三月